涌谷町埋蔵文化財調査報告書第３集

ツナギの沢貝塚

―― 平成９年度県道河南築館線
道路改良工事に伴う調査概報 ――

平成10年３月

涌谷町教育委員会
宮城県古川土木事務所

涌谷町埋蔵文化財調査報告書第３集

ツナギの沢貝塚

―― 平成９年度県道河南築館線
道路改良工事に伴う調査概報 ――

平成10年３月

涌谷町教育委員会
宮城県古川土木事務所

序　文

涌谷町には数多くの文化財が残されており、原始・古代より、豊かな自然と長い伝統の中で培われてきた先人達の文化・生活の営みの証しであります。

近年、文化財については保護・管理という面から文化財の有効活用へと展開が求められており、私達は、このような先人達の貴重な文化遺産の示唆するところを汲み取り、大切に保存し、活用を図りながら将来へと受け継いでゆく責任を担っております。

さて、県道河南築館線道路改良工事に伴い宮城県古川土木事務所から委託をうけ、ツナギの沢貝塚について事前調査を実施いたしました。本遺跡は、近隣に国指定史跡長根貝塚や中沢目貝塚など数多くの縄文時代の貝塚が分布しており、それらとの関連や当時の人びとの様子などを知る貴重な指標の一つであると思われます。今回、この発掘調査について概報として皆様に調査の成果の一部を報告することとなりました。本書が研究者のみならず多くの方々に広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助となれば幸いです。

最後に、遺跡調査にあたってご指導・ご協力いただきました宮城県教育庁文化財保護課をはじめ、なにかとご協力を下さいました宮城県古川土木事務所や関係者の皆様方に、心より感謝とお礼を申し上げます。

平成10年３月31日

涌谷町教育委員会教育長
木　村　達　夫

例　言

1．本書は、宮城県古川土木事務所が担当する県道河南築館線改良工事に伴う、ツナギの沢貝塚の第1次発掘調査（遺構確認調査を含む）の発掘調査概報である。

2．本書の編集・執筆は、涌谷町教育委員会社会教育課の協議のもと、福山宗志が担当し、執筆を行った。

3．発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の機関・方々に指導・助言を賜った。（五十音順・以下敬称略）

阿部博志、大友透、加藤道男、須田良平、藤沼邦彦、真山悟、村田晃一、山田晃弘、
東北歴史資料館、宮城県教育庁文化財保護課、涌谷町文化財保護委員各位、

4．石器の材質は、東北大学教授　蟹沢　聰史　氏により鑑定されたサンプルをもとに、肉眼観察したものである。

5．本調査の諸記録・出土遺物等の調査資料は、涌谷町教育委員会が一括して保管している。

6．図中・本文中使用の方位北（N）は、すべて真北である。

7．調査の測量は、調査区内の任意の基準点1（X＝－156691.757km・Y＝＋26881.101km）、基準点2（X＝－156679.268km・Y＝＋26851.302km）を結ぶ直線を基準とした平面直角座標によって位置関係を記録した。この東西軸に直交する南北軸は、国家座標第X系に対して約30°東に偏している。

8．本書で使用した地図は、建設省国土地理院発行の1：25,000（承認番号）平八、東復第41号のものを使用した。

9．本報告書中の土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を使用した。

10．観察表内における法量で使用する（　）は推定、△は残存範囲の計測を表す。

11．遺構実測図および遺物実測図の用例は、以下のとおりである。

遺構平面図でのスクリーントーン用例

石

貼り床

焼　面

遺物でのスクリーントーン用例

アスファルト

磨　面

本 文 目 次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と調査要領……1
1．調査に至る経緯……1
2．調査要領……1
3．調査の方法と経過……2
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……3
1．遺跡の立地と地理的環境……3
2．歴史的環境……4
第Ⅲ章　調査の成果……6
1．基本層序……6
2．発見した遺構と遺物……6
1）竪穴住居跡と出土遺物……8
2）遺物包含層＜東地区＞……21
土器……21
土製品……38
石製品……41
第Ⅳ章　まとめ……46

挿図目次

第１図　涌谷町の位置図……３
第２図　地形分類図……３
第３図　遺跡の位置と周辺の遺跡……４
第４図　調査区位置図……５
第５図　調査区全図……５
第６図　遺構配置図……７
第７図　１号住居跡と出土遺物……８
第８図　２号住居跡と出土遺物……10
第９図　３号住居跡……11
第10図　４号住居跡……11
第11図　４号住居跡出土遺物……12
第12図　５号住居跡、６号住居跡と
　出土遺物……13
第13図　７号住居跡と出土遺物……15
第14図　８号住居跡と出土遺物……16
第15図　９、10号住居跡……17
第16図　９号住居跡出土遺物……18
第17図　11号住居跡……19
第18図　12号住居跡と出土遺物……20
第19図　遺物包含層東地区１層出土土器……23
第20図　遺物包含層東地区１層出土土器……24
第21図　遺物包含層東地区２層出土土器……28
第22図　遺物包含層東地区２層出土土器……29
第23図　遺物包含層東地区２層出土土器……30
第24図　遺物包含層東地区２層出土土器……31
第25図　遺物包含層東地区２層出土土器……32
第26図　遺物包含層東地区３層出土土器……34
第27図　遺物包含層東地区３層出土土器……35
第28図　遺物包含層東地区３層出土土器……36
第29図　遺物包含層東地区３層出土土器……37
第30図　遺物包含層東地区出土土製品……39
第31図　遺物包含層東地区出土土製品……40
第32図　遺物包含層東地区出土石器……42
第33図　遺物包含層東地区出土石器……43
第34図　遺物包含層東地区出土石器……44
第35図　遺物包含層東地区出土石器……45

挿表目次

第１表　遺物包含層（東地区）出土土器観察表……48
第２表　遺物包含層（東地区）出土土製品観察表①……53
第３表　遺物包含層（東地区）出土土製品観察表②……53
第４表　遺物包含層（東地区）出土石器観察表……54

写 真 目 次

写真１　調査区近景
写真２　遺物包含層分布範囲状況
写真３　遺物包含層（南北）セクション状況
写真４　調査区西壁（南北）セクション状況
写真５　遺物包含層遺物出土状況①
写真６　遺物包含層遺物出土状況②
写真７　住居跡検出状況
写真８　１、２号住居跡完掘状況
写真９　６号住居跡完掘状況
写真10　６号住居跡（炉）検出状況
写真11　６号住居跡（炉）セクション状況
写真12　７号住居跡完掘状況
写真13　８号住居跡完掘状況
写真14　９号住居跡完掘状況
写真15　12号住居跡完掘状況
写真16　遺物包含層出土土器①
写真17　遺物包含層出土土器②
写真18　遺物包含層出土土製品
写真19　遺物包含層出土石器
写真20　住居跡出土土器

第Ⅰ章　調査に至る経緯と調査要領

1. 調査にいたる経緯

平成8年度に宮城県古川土木事務所長より、ツナギの沢貝塚内に予定している県道河南築館線道路改良工事計画と文化財とのかかわりについての協議書が、町教育委員会経由で県教育委員会に提出された。その結果、そのままでの計画では遺跡の主体部が工事対象区域にかかるため、県文化財保護課、県古川土木事務所、町教育委員会の三者による協議の結果、工事区域が遺跡の南端に変更された。そして、その区域での遺跡の内容を把握するため、遺構確認調査が必要との県教育委員会からの回答を受け、三者による協議の結果、県文化財保護課の協力のもと町教育委員会が遺構確認調査を実施することとなった。

平成8年12月に遺構確認調査を行った結果、調査区西側より多量の遺物（縄文土器、石器等）を含む遺物包含層が検出された。

その調査結果を基に、三者により遺跡の取り扱い及び今後の対応について協議を行い、事前調査を県文化財保護課の協力のもと町教育委員会の主体で行うこととなった。

その後、具体的な条件の整備、協議等の打ち合わせを経て、平成9年7月1日付けで委託協定を締結し、受託調査事業として町教育委員会が実施することとなった。

2. 調査要領

(1)	遺跡名	ツナギの沢貝塚（遺跡番号37003）
(2)	所在地	涌谷町小里字大平地内
(3)	調査期間	平成９年８月18日～９月30日
		室内整理　平成９年10月１日～平成10年３月31日
(4)	調査面積	調査対象面積（約5,000㎡）
		実質調査面積（約1,900㎡）
(5)	調査指導・協力	宮城県教育庁文化財保護課
(6)	調査主体	涌谷町教育委員会
(7)	調査担当	涌谷町教育委員会社会教育課
		課長　本郷　和郎　　課長補佐　佐藤　建雄
		主事　菅原　美紀　　学芸員　福山　宗志
		宮城県教育庁文化財保護課
		主任主査　佐藤　則之　　技師　佐藤　憲幸
		技師　八嶋　伸明
(8)	調査協力	㈱吉田産業、仙北測量

(9) 発掘調査参加者

＜野外調査＞24名

浅野勝子、青野圭一、遠藤みつ子、大友千代子、大友マリ、木村サエ子、桜田ツル子、佐々木愛子、佐藤幸代、佐藤良子、鈴木愛子、平忠一、平仲子、平のり子、戸澤功、畑岡初子、練生川寛子、野村貞子、松岡ちや子、松下勝子、松村昇、松本咲子、三神ふみえ

＜室内整理＞ 4名

青野圭一、佐藤幸代、畑岡初子、練生川寛子、松本咲子

3. 調査の方法と経過

調査区が丘陵の斜面に位置し、土砂を搬出する場所がないため、調査区内の西から東に向かって、南北にトレンチを空けながら遺構が検出される部分まで進み、遺構が検出されるとその部分の全面発掘調査を行い、遺構等の存在しない部分を土捨て場として調査を行った。

調査は、8月18日から開始し、遺構確認面まで重機、人力で掘り下げた後、遺構の平面プランの確認作業を行い、遺物包含層が1箇所確認されたため、調査区全体を含め1／200の平面図を作成し、包含層の範囲を記入した。包含層の区域を任意で東西に区分し精査を行い、出土遺物は層位毎に取り上げた。また、特に必要と考えられる遺物が出土した際は、出土状況の写真撮影を行った後、仮遺物番号を付した後に取り上げを行った。

精査を進めていくうちに包含層下より、住居跡と思われるプランを検出したため、その他の遺構の確認を行うと共に、包含層と各遺構毎の関係が判るようセクションを残しながら包含層・遺構の精査を行った。全ての遺構の精査がほぼ終了した後、遺構の検出された範囲に任意で3m単位の方眼の測量基準点を設定し、1／20で平面図を作成し、調査区の全体写真撮影を実施した。その後、遺構・遺物について諸記録の再検討を行い、9月30日に全ての野外調査を終了した。

調査区の全体図、遺物包含層の範囲についての平面図は1／200、その他の遺構等の実測図（平面図・断面図）については1／20で作成した。平面図のレベル記入については調査区付近の固定点1（15.155m）より、仮レベル杭（24.380m）にレベル移動を行い、それを基準として測定した。なお、平面図グリット基準点1、基準点2の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している。（基準点1：X＝－156691.757km、Y＝＋26881.101km、基準点2：X＝－156679.268km、Y＝＋26851.302km）また、基準点1を起点とし（W＝0＝E、N＝0＝S）、3m間隔（1部のみ2m間隔）で南北方向をN3～S6、東西方向をW0～W32で表記し調査区内における各遺構などの位置関係を示した。（基準点1：W＝0＝E、N＝0＝S、基準点2：W32、N＝0＝S）写真記録については、35mm判カラーリバーサルとモノクロを適宜使用した。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

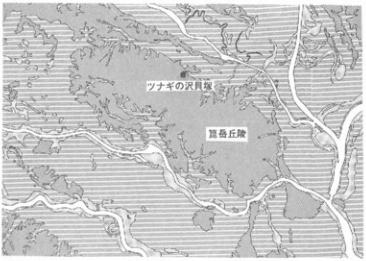
1. 遺跡の立地と地理的環境

ツナギの沢貝塚は、宮城県遠田郡涌谷町小里字大平地内に所在し、涌谷町の中央に位置する箆岳山の北側を国道346号線より約2km 北西にはいった地点である。

涌谷町は、宮城県の大崎平野東部に位置し（第１図）、北は田尻町と米山町、西は田尻町と小牛田町、南は南郷町と河南町、西は桃生町と豊里町と接する。標高236mの箆岳丘陵が中央部に位置して東西に連なり町を南北に分断し、北部では迫川によって形成された湿地と長根丘陵が、町南部では江合川によって形成された自然堤防と湿地が分布する。迫川と江合川は町の西部で旧北上川と合流して南下し石巻湾に注ぐ。

第１図　涌谷町の位置図

ツナギの沢貝塚は、前述の地形分類のうち箆岳丘陵の北部縁辺に位置し、すぐ北に湿地帯が隣接する。（第2図）丘陵地の基盤は、新第三紀、鮮新世代の砂岩によって形成され、高地の地層が露呈している部分では追戸層と呼ばれる中新世の層から貝類化石の出土が知られている。湿地帯は、大崎平野の迫川周辺の低地に属し、低地のため排水条件が悪く、主に水田地として利用されている。昭和25年に起きた江合川・迫川の氾濫を始めとして、近年まで湿地帯を氾濫原として幾度となく氾濫があり、河川の影響が極めて大きく影響していると思われる。そのため集落は丘陵の縁辺や微高地に位置し、周辺の遺跡も同様な場所に所在し、特に縄文時代の貝塚が多く分布する。このため、縄文時代の海進によりこの付近まで海岸線が迫っていたが、その後も長く低湿地であったと考えられている。（1965：涌谷町）



第２図　地方分類図

2．歴史的環境

ここでは、本遺跡の主要な時代である縄文時代を中心に周辺の歴史的環境がどのようなものであったのか見ていきたい。

＜縄文時代＞本遺跡の周辺には、前述のとおり丘陵上などに多くの遺跡が分布する。そのうちのほとんどが貝塚であるが、それらのうちでも、本遺跡の北側に位置する長根丘陵には国史跡長根貝塚や、遮光器土偶の出土で有名な恵比須田貝塚、中沢目貝塚など、宮城県内陸部の貝塚の中でも大きな貝塚が集中している。これらの貝塚は、主に淡水性の貝層で形成されるため、内陸部での縄文時代の在り方について今後の研究の成果が期待されている。長根貝塚は、早期から晩期にいたるまで長期間に形成され、環状形の貝層が分布するなど東北地方有数の貝塚の１つである。

＜弥生時代・古墳時代＞本遺跡の周辺には、弥生時代・古墳時代の遺跡は確認されておらず、米山町鈴懸で出土したとされている甕形土器が、五穀神社に奉納されていることが知られているのみである。

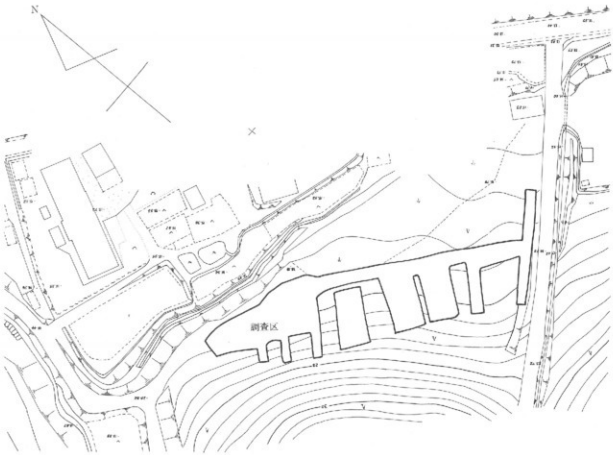
古墳時代の終末期から、特に町内の江合川流域の丘陵に、竜殻寺下横穴墓群や一箕横穴墓群、追戸・中野横穴墓群など、篦岳丘陵南辺に横穴墓群が築造される。追戸・中野横穴墓群では、出土品などから7世紀後半からの築造開始の位置付けがなされるとともに、特に8世紀初頭に成立する長根窯跡で製産された須恵器が追戸横穴墓群Ｂ地区出土遺物と需給の関係にあったことが指摘されている。

＜奈良・平安時代＞奈良時代になると、多賀城の創建に伴い律令制が浸透し、涌谷町付近は「続日本紀」天平14年（742）正月条に見える「黒川以北十郡」のうち「小田郡」に属していたとされている。長根窯跡や六郎窯跡などでは、町内において窯業生産が８世紀から行われていたことが知られている。又、国史跡黄金山産金遺跡を主とした篦岳丘陵一体では、天平21年（749）に東大寺大仏造営のための金を日本で初めて産出・献上しており、年号が改められ、調・庸といった租税の免除がなされるなど、古代東北地方の開拓史の一端や律令制における国家経営の一端を伺わせる地域となっている。

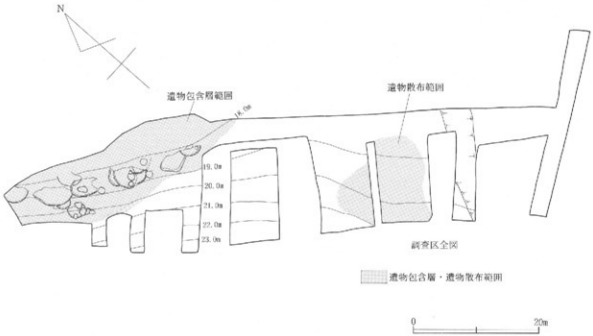
S＝1/50,000

番　号	遺　跡　名
1	ツナギの沢貝塚
2	山王沢貝塚
3	松崎貝塚
4	下長根遺跡
5	大貫囘嶋遺跡
6	国史跡長根貝塚
7	長根新田遺跡
8	長根窯跡群
9	猪込遺跡
10	八幡館跡
11	八幡遺跡
12	天神館跡
13	小里表遺跡
14	道祖神囲貝塚

第３図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第４図　地調査区位置図　(S=1/500)



第５図　調査区全図

第Ⅲ章　調査の成果

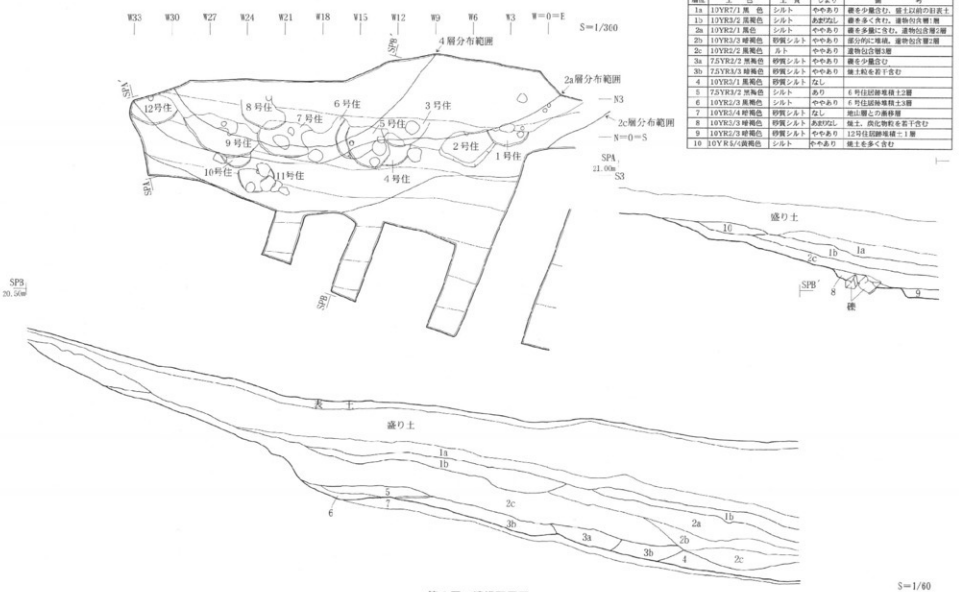
1. 基本層序

今回調査対象となった区域は、現況は杉を植林しているが、地元の方によると以前に採草地とするため、重機により造成が行われた所である。そのため、調査区中央から東側の基盤の落ち込む谷地では最高約１ｍの土盛りが認められ、その下に旧表土が分布する。

基本層位の内容は、前述のとおり調査区中央と東端を丘陵の尾根として調査区北側に向かって緩やかに落ち込む谷地となっており、基本的にはこの谷地の層位で調査区全体にほぼ対応し、調査区東側の一番落ち込みの著しい部分で４層に大別される。（第６図）この内、第２層は３層（２ａ、２ｂ、２ｃ層）に細分される。また、第３層も２層（３ａ、３ｂ層）に細分される。層は基本的にシルト、粘土質シルトで構成され、土色も10ＹＲ２／１～３／３と褐色～黒褐色となり、１層から３ｂ層まで礫を含む。２ｂ、３ｂ層は谷地内のみに認められる部分的堆積層であり、調査区中央～西部で認められた層位は、東側で認められた層位のうち第１、２ｃ、４層のみで薄く堆積する。丘陵全域に分布する層と谷地にのみ認められる層の分布の２種類の層がある。１層～２ｃ層で多量の遺物の包含が認められたため、主に１、２ａ、２ｃ層を遺物包含層（１～３層）として遺物を取り上げた。その他の遺構は主に調査区東側の谷地を中心として２ｃ層下～４層・地山上の間で検出している。調査区西側でも４層上面に遺物の包含が若干認められた。

2. 発見した遺構と遺物

今回の調査では、調査区東側の谷地を中心として遺物包含層、その下から住居跡12棟と土壙１基が検出された。調査では、第６図にみられるＳＰＢ－ＳＰＢ'を境として東地区、西地区に分けて出土遺物を分類している。遺物包含層からの出土は約40箱にのぼるため、量・質共に遺物包含層をよく反映していると思われる包含層東地区と、住居跡の出土資料の内、主な物について概報として今回取り扱うこととし、その他の遺物はまだ整理中である。



層位	土色	土質	しまり	備考
1a	10YR7/1黒色	シルト	ややあり	礫を少量含む．盛土以前の耕表土
1b	10YR3/2黒褐色	シルト	あまりなし	礫を多く含む．遺物包含層1層
2a	10YR2/1黒色	シルト	ややあり	礫を多量に含む．遺物包含層2層
2b	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	ややあり	部分的に堆積．遺物包含層2層
2c	10YR2/2黒褐色	ルト	ややあり	遺物包含層3層
3a	7.5YR2/2黒褐色	砂質シルト	ややあり	礫を少量含む．
3b	7.5YR3/3暗褐色	砂質シルト	ややあり	強土粒を若干含む
4	10YR3/1黒褐色	砂質シルト	なし	
5	7.5YR3/2黒褐色	シルト	あり	6号住居跡堆積土2層
6	10YR2/2黒褐色	シルト	ややあり	6号住居跡堆積土3層
7	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	なし	地山層との漸移層
8	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	あまりなし	強土．炭化物粒を若干含む
9	10YR2/3暗褐色	砂質シルト	ややあり	12号住居跡堆積土1層
10	10YR5/4鈍黄色	シルト	ややあり	強土を多く含む

第6図　遺構配置図

(1) 竪穴住居跡と出土遺物

今回の調査では、竪穴住居跡12棟と土壙１基が遺物包含層に覆われる形で検出されている。土壙については遺物等の出土がなく、時期等不明である。以下、住居跡について述べることとする。

１号住居跡（第７図）

［位置・確認面］遺物包含層東地区（W1～5　S1～N1）遺物包含層３層下、地山上面。

［遺存状況］北半部分は撹乱、遺物包含層により削平され、南側の約1／3のみ残存。

［重複］２号住居跡と重複し、これより新しい。

［包含層との関係］住居の堆積土が遺物包含層に覆われ、これより古い住居跡である。

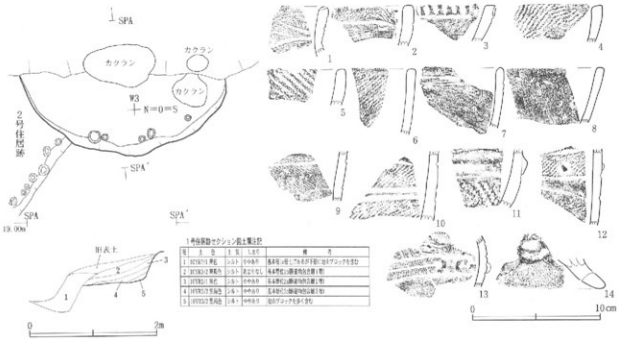
［平面形・規模］円形を呈すると推定され、規模は南北1.2m以上、東西3.3m以上となる。

［堆積土］５層から成り、５層は住居壁の崩落土である。堆積土は、直接遺物包含層３層で覆われる。

［壁の状況］地山面を壁面として、壁高は残存最大高20.5cm で外傾する。

［床面の状況］地山面を床面として、北に向かってやや傾斜する。

［炉］炉の確認はできなかったが、住居跡中央の撹乱の堆積層中に、焼土ブロックが含まれるため、この付近に炉があったと思われる。



1号住居跡セクション図土集計記

図	土	色	土	質	土	性	備 考
1	10YR3/1	黒色	シルト	ウキ&ウ			基本地上に焼土が大量に含まれブロックを含む
2	10YR3/2	黒色	シルト	ネエリウ			基本地上に焼土が含まれ(炉)
3	10YR3/1	黒色	シルト	ウキ&ウ			基本地上に焼土が含まれ(炉)
4	10YR3/2	黒色	シルト	ウキ&ウ			基本地上に焼土が含まれ(炉)
5	10YR3/2	黒色	シルト	ウキ&ウ			焼土ブロックを多く含む

1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	出土地区・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	備考	写真図版
7－1	1号住・埋土	－	－	(△3.9)	部位沈線、摩滅	ナデ		
7－2	1号住・埋土	－	－	(△3.2)	LR、平行沈線	ナデ		
7－3	1号住・埋土	－	－	(△3.0)	口縁部：沈線区画内刻み目	ミガキ		20－1
7－4	1号住・埋土	－	－	(△3.0)	LR	ナデ？		
7－5	1号住・埋土	－	－	(△2.8)	RL	摩滅		
7－6	1号住・埋土	－	－	(△5.1)	LR	ナデ		
7－7	1号住・埋土	－	－	(△5.6)	平行沈線	摩滅		
7－8	1号住・埋土	－	－	(△4.5)	ミガキ？	ミガキ		20－2
7－9	1号住・埋土	－	－	(△4.0)	充填磨消縄文RL	ナデ		
7－10	1号住・埋土	－	－	(△5.3)	LR→平行沈線	ミガキ		
7－11	1号住・埋土	－	－	(△4.3)	横位隆帯RL	ナデ？		
7－12	1号住・埋土	－	－	(△6.4)	人風文？(LR)、粘土粒貼付	ミガキ		
7－13	1号住・埋土	－	－	(△4.5)	沈線区画内刻み目、粘土粘付	指押圧痕		20－3
7－14	1号住・埋土	－	－	(△2.7)	造かし、摩滅	摩滅		

第７図　１号住居跡と出土遺物

［柱穴］壁際の床面に、５つの小柱穴を確認。

［周溝］特に検出されなかった。

［その他の住居内施設］住居跡東側に、不定形のピットを１箇所検出したが、遺物等の出土がないため、不明である。

［出土遺物］（第７図）

床面からの出土はなく、全て堆積層埋土中から縄文土器破片が出土している。１～８は、口縁部片、９～13は体部片、14は台部の破片である。いずれも小破片であり、摩滅が著しく器形を特定できない。

３は、口縁部外面に平行沈線が１条巡り、区画内に刻み目をもつ。11は、粘土紐貼付けにより隆帯が施される。12は、入組文？が施文され、その上に粘土粒が貼付けられる。13は、沈線で工字状文を描き、区画内に刻み目と粘土粒貼付けを施すものである。14には、透かしと推定される部分が一部残存する。

２号住居跡（第８図）

［位置・確認面］遺物包含層東地区（W4～9　S3～N1）遺物包含層３層下、地山上面。

［遺存状況］北半部分は遺物包含層により削平され、南側の約1／2のみ残存。

［重複］１号住居跡と重複し、これより古い。

［包含層との関係］住居の堆積土が遺物包含層に覆われ、これより古い住居跡である。

［平面形・規模］やや隅丸方形ぎみの円形を呈すると推定され、規模は南北2.7m以上、東西４m以上となる。

［堆積土］壁際に１層のみ残存し、他は直接遺物包含層３層で覆われる。

［壁の状況］地山面を壁面として、壁高は残存最大高40cmで、外傾して立ち上がる。

［床面の状況］地山面を床面として、北に向かってやや傾斜する。

［炉］住居跡中央部分に、地床炉と思われる焼面が残存している。

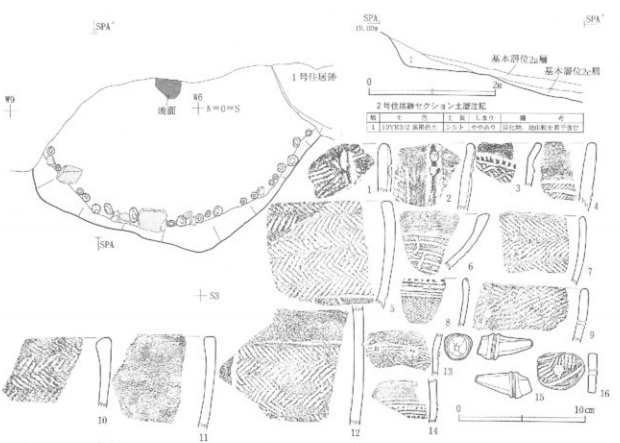
［柱穴］壁際の床面に小柱穴を確認。小柱穴間に石が検出されたが、これは地山内のものであり、柱穴との関係は特に見られなかった。

［周溝］特に検出されなかった。

［その他の住居内施設］特に検出されていない。

［出土遺物］（第８図）

床面からの出土はなく、全て堆積層埋土中から縄文土器破片が出土している。１～11は、口縁部片、12～14は体部片、15、16は土製品である。いずれも小破片であり、器形を特定できないが、殆どが鉢もしくは深鉢形土器である。１、２は縦位隆帯上に刺突を施すものである。３は平行沈線間に刻み目が施される。６はＬＲ縄文施文後、沈線で入組状文が施される。８は、羊歯状文が施文される。13は、弧状連結文とＬＲ縄文が施文され、平行沈線上に粘土粒貼付けがなされる。14は、平行化した羊歯状文が施文される。15は、土製品であるが小破片のため形状、部位が特定できない。16は、円盤状土製品で沈線間に磨消縄文が施文される。円盤の中心部には穿孔が見られる。



2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	出土地区・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	備考	写真図版
8－1	2号住・埋土	—	—	(△5.8)	層位接痕→斜突、LR		ミガキ	20－4
8－2	2号住・埋土	—	—	(△5.3)	層位接痕→斜突、LR？		ミガキ	
8－3	2号住・埋土	—	—	(△3.4)	平行沈線間取り込、RL？		ナデ？	
8－4	2号住・埋土	—	—	(△5.4)	LR→平行沈線		ミガキ	
8－5	2号住・埋土	—	—	(△5.0)	羽状縄文（LR、RL）沈線区画		ミガキ	20－5
8－6	2号住・埋土	—	—	(△4.0)	LR、入組文		ミガキ	20－6
8－7	2号住・埋土	—	—	(△5.3)	羽状縄文（LR、RL）		ナデ？	
8－8	2号住・埋土	—	—	(△5.3)	口縁部肥厚、口～胴部貝殻腹の圧痕文、RL		ミガキ	
8－9	2号住・埋土	—	—	(△4.2)	LR、穿孔		ナデ	
8－10	2号住・埋土	—	—	(△5.2)	羽状縄文（LR、RL）		ナデ	
8－11	2号住・埋土	—	—	(△7.3)	撚糸状文		ナデ後ミガキ	
8－13	2号住・埋土	—	—	(△9.5)	羽状縄文（LR、RL）沈線区画		ミガキ	
8－15	2号住・埋土	—	—	(△3.4)	平行沈線、弧状連結文（LR）、粘土粒貼付		ミガキ	20－7
8－14	2号住・埋土	—	—	(△3.3)	平行沈線、波線的羊歯状文		ミガキ	
8－15	2号住・埋土	種類・部位：土製品・不明			特徴：沈線、隆帯、ミガキ			20－8
8－16	2号住・埋土	長さ×幅×厚さ：			特徴：磨滅縄文、LR、中央部穿孔		円盤状土製品	20－9

第8図　2号住居跡と出土遺物

3号住居跡（第9図）

［位置・確認面］遺物包含層東地区（W9～13、S1～N2）遺物包含層3層下、地山上面。

［遺存状況］柱穴列と壁際に廻っていたと思われる周溝の一部のみ残存。

［重複］4、5号住居跡と重複し、5号住居跡の床面の一部が周溝を覆っているためこれより古い。4号住居跡との関係は不明である。

［包含層との関係］住居が遺物包含層に覆われるため、これより古い住居跡である。

［平面形・規模］周溝の状況からほぼ円形を呈すると推定され、規模は南北2.2m以上、東西3.9m以上となる。

［堆積土］直接遺物包含層3層で覆われる。

［壁の状況］遺物包含層などにより削平されているとみられ、残存していない。

［床面の状況］地山面を床面としていたと思われるが、削平により残存していない。

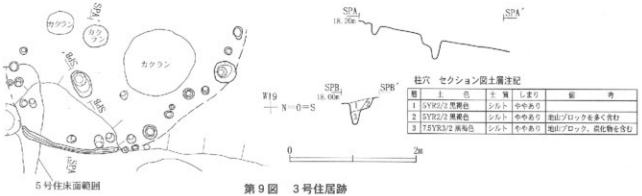
［炉］特に検出されていない。

［柱穴］周溝の内側に柱穴列が見られ、炉の南側に主柱穴を1箇所検出している。

［周溝］住居跡南隅に一部残存している。幅約10㎝で、深さ４～５㎝。

［その他の住居内施設］特に検出されていない。

［出土遺物］特に出土していない。



層	土色	土質	しまり	備考
1	5YR2/2 黒褐色	シルト	ややあり	
2	5YR2/2 黒褐色	シルト	ややあり	地山ブロックを多く含む
3	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	ややあり	地山ブロック、炭化物を含む

第９図　３号住居跡

４号住居跡（第10図）

［位置・確認面］遺物包含層東地区（W11～13　S3～N1）遺物包含層３層下、地山上面

［遺存状況］柱穴列と壁際に廻っていたと思われる周溝の一部のみ残存。

［重複］３、５号住居跡と重複するが、関係は不明である。

［包含層との関係］住居が遺物包含層に覆われるため、これより古い住居跡である。

［平面形・規模］周溝の状況からほぼ円形を呈すると推定され、規模は南北1.6m以上、東西1.5m以上となる。

［堆積土］薄く堆積層１層が住居跡を覆い、その上は遺物包含層３層で覆われる。

［壁の状況］遺物包含層などにより削平されているとみられ、残存していない。

［床面の状況］地山面を床面としていたと思われるが、削平により残存していない。

［炉］特に検出されていない。

［柱穴］周溝の内側に柱穴列が一部残存する。

［周溝］住居跡南側で一部残存している。幅約10㎝で深さ２～３㎝。

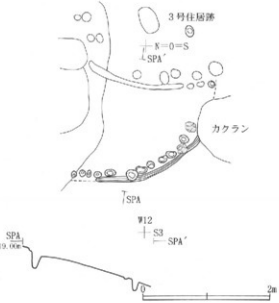
［その他の住居内施設］特に検出されていない。

［出土遺物］薄く住居の上を堆積する埋土中から、縄文土器が数点と岩偶が出土している。（第11図）

１～４、６は口縁部片、５、７、８は体部片である。

５を除き、沈線区画内に磨消縄文が施される。

９は石製品で人面と三角形の体部をもつ。頚部に穿孔がなされることから、装飾品と推定される。破損部にせつり面がみられる。



第10図　４号住居跡

4号住居跡出土遺物観察表

図番	観察号	出土地区・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	備考	写真図版
11−1	4号住・埋土	−	−	(△6.0)	沈線区画内羽状縄文(LR, RL)結束	ミガキ			2010
11−2	4号住・埋土	−	−	(△4.3)	沈線区画内RL	摩滅			
11−3	4号住・埋土	−	−	(△3.3)	弧状連結文？（充填LR）	摩滅			
11−4	4号住・埋土	−	−	(△5.1)	平行沈線間刻み目、RL	ナデ			
11−5	4号住・埋土	−	−	(△4.3)	平行沈線間刻み目、LR	ミガキ			
11−6	4号住・埋土	−	−	(△2.8)	弧文、沈線間刻み目	ミガキ			2011
11−7	4号住・埋土	−	−	(△5.9)	入組状？文(LR?)、粘土粒貼付	ナデ？			2012
11−8	4号住・埋土	−	−	(△5.5)	入組状文？（LR）	ミガキ			
11−9	4号住・埋土	長さ×幅×厚さ:3.5×2.0×2.3			特徴：人面、腹部：工字状？文	石材：デイサイト質凝灰岩	人面付石製造装飾品、19.5g		2031

第11図　4号住居跡出土遺物

5号住居跡（第12図上）

［位置・確認面］遺物包含層東地区（W12〜16、S3〜N1）遺物包含層3層下、地山上面。

［遺存状況］北側と東側を包含層等により削平され、約2／3のみ残存。

［重複］3、4、6号住居跡と重複し、3号住居跡より新しく、6号住居跡より古い。4号住居跡との関係は不明である。特に、6号住居跡は、5号住居跡を埋め戻して整地している。

［包含層との関係］住居が6号住居跡に埋め戻され、その上を包含層が覆うため、これより古い住居跡である。

［平面形・規模］ほぼ円形を呈すると推定され、規模は南北3.1m以上、東西3.8m以上となる

［堆積土］3層で構成されるが、1、5層は6号住居跡構築時の整地層である。

［壁の状況］地山面を壁とし、残存壁高は最大約60cmで、外傾する。

［床面の状況］地山面、4層上面を床面とし、踏み締まり等は特に見られない。

［炉］特に検出されていない。

［柱穴］壁際に柱穴が4カ所検出された。

［周溝］特に検出されていない。

［その他の住居内施設］特に検出されていない。

［出土遺物］特に検出されていない。

6号住居跡（第12図下）

［位置・確認面］遺物包含層東地区（W14〜17、S2〜N2）遺物包含層3層下、地山上面。

［遺存状況］北側と東側を包含層等により削平され、約2／3のみ残存。

［重複］5号住居跡と重複し、5号住居跡を埋め戻して整地し、構築している。

［包含層との関係］直接、遺物包含層3層に覆われるため、これより古い住居跡である。

［平面形・規模］ほぼ円形を呈すると推定され、規模は南北1.8m以上、東西2.4m以上となる。

［堆積土］炉内の崩落土のみ残存し、直接遺物包含層で覆われる。

［壁の状況］地山面を壁とし、残存壁高は最大約40cmで外傾する。

［床面の状況］地山面、４層上面、５号住居跡の埋土上面を床面とし、４層上面と５号住居跡部分に固い踏み締まりがみられる。

［炉］自然石で囲む簡単な石組み炉が住居跡南側に検出されている。

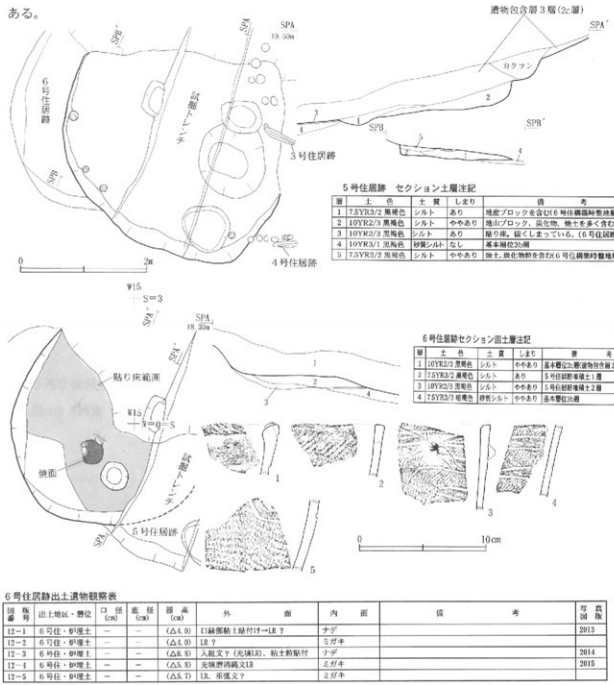
［柱穴］特に検出されていない。

［周溝］特に検出されていない。

［その他の住居内施設］炉の東側に浅く掘り窪められたピットを１カ所検出している。

［出土遺物］（第12図）

炉内より遺物が出土している。１～３は口縁部片で、４、５は体部片である。いずれも鉢もしくは深鉢形土器となると推定される。１は、口縁部に粘土貼付け後ＬＲ？縄文を施文するもので、他は無文となるものである。３～５は、平行沈線や弧文などにより区画した内部を磨消縄文施文するものである。



5号住居跡　セクション土層注記

層	土色	土質	しまり	備考
1	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	あり	地山ブロック含む(6号住構築時整地層)
2	10YR2/3 黒褐色	シルト	ややあり	地山ブロック、炭化物、焼土を多く含む
3	10YR2/3 黒褐色	シルト	あり	貼り床。固くしまっている。(6号住居跡床面)
4	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	なし	基本層位3c層
5	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	ややあり	焼土、炭化物粒を含む(6号住構築時整地層)

6号住居跡セクション土層注記

層	土色	土質	しまり	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	やや有り	基本層位3層遺物包含層3層)
2	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	あり	5号住居跡埋積土1層
3	10YR2/3 黒褐色	シルト	やや有り	5号住居跡埋積土2層
4	7.5YR2/3 暗褐色	砂質シルト	やや有り	基本層位3c層

6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	出土地区・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	備考	写真図版
12－1	6号住・炉埋土	－	－	(4.6)	口縁部粘土貼付け→LR？	ナデ		2013
12－2	6号住・炉埋土	－	－	(4.0)	LR？	ミガキ		
12－3	6号住・炉埋土	－	－	(4.8)	入組文？(充填LR)、粘土粒貼付	ナデ		2014
12－4	6号住・炉埋土	－	－	(5.5)	充填押捻縄文LR	ミガキ		2015
12－5	6号住・炉埋土	－	－	(5.7)	LR、単弧文？	ミガキ		

第12図　５号住居跡、６号住居跡と出土遺物

7号住居跡（第13図）

［位置・確認面］遺物包含層東地区（W19～23、S2～N2）遺物包含層3層下。

［遺存状況］北側と東側を包含層等により削平され、約2／3のみ残存。

［重複］8、9号住居跡と重複し、9号住居跡より古く、8号住居跡より新しい。

［包含層との関係］堆積土が遺物包含層3層に覆われるため、これより古い住居跡である。

［平面形・規模］楕円形を呈すると推定され、規模は南北2.8m以上、東西3.6m以上となる。

［堆積土］5層堆積し、全て自然堆積である。層内では全体的に炭化物が多く含まれる。

［壁の状況］地山面を壁とし、残存壁高は最大約30cmで、ゆるやかに外傾する。

［床面の状況］地山面、4層上面、8号住居跡の埋土上面を床面とする。特に踏み締まり等はみられなかった。

［炉］焼面と炭化物を多量に含む土が住居跡ほぼ中央と推定される部分に検出されている。

［柱穴］住居跡壁際に小柱穴が周り、その内側に柱穴を3ケ所検出している。

［周溝］特に検出されていない。

［その他の住居内施設］住居跡内ほぼ中央に、部分的にフラスコ状の壁を持つ土壙が1基ある。

［出土遺物］（第13図）

住居内堆積土、土壙内堆積土より遺物が出土している。1～7、10～12は口縁部片であり、8、9、13～15は体部片である。いずれも鉢または深鉢形土器となると推定される。

1、5、7、8、13、14は沈線区画内に地紋を施すもので、3、6、10には沈線区画内に刻み目が施される。11、15には平行化した羊歯状文が施文される。2、4は無文であり、4には穿孔が見られる。

12は、櫛歯状工具（5本1組）により施文される。

8号住居跡（第14図）

［位置・確認面］遺物包含層東地区（W21～25、N1～N4）遺物包含層3層下、4層上面。

［遺存状況］北側と東側を包含層等により削平され、約1／2のみ残存。

［重複］7号住居跡と重複し、これより古い。

［包含層との関係］住居内堆積土が遺物包含層3層に覆われるため、これより古い住居跡である。

［平面形・規模］隅丸方形ぎみの円形を呈すると推定され、規模は南北2.6m以上、東西3.8m以上となる。

［堆積土］1層堆積する。

［壁の状況］4層面を壁とし、残存壁高は最大約30cmで、外傾する。

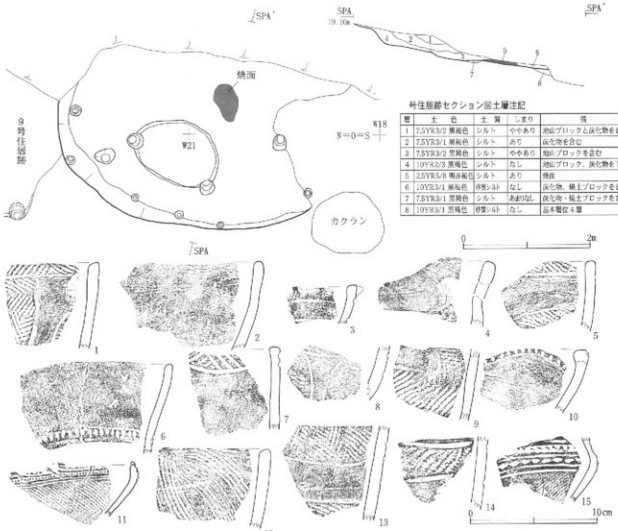
［床面の状況］地山面、4層上面を床面とし、焼土と炭化物を多く含み固くしまっている。

［炉］住居跡のほぼ中央と推定される部分に焼面を検出している。

［柱穴］径30cmほどの柱穴が4カ所検出されている。

［周溝］特に検出されていない。

［その他の住居内施設］特に検出されていない。



号住居跡セクション図土層注記

層	土色	土質	しまり	備考
1	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	やや あり	地山ブロックと灰化物をまばらに含む
2	7.5YR3/1 黒褐色	シルト	あり	灰化物を含む
3	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	やや あり	地山ブロックを含む
4	10YR2/3 黒褐色	シルト	なし	地山ブロック、灰化物を下方に多く含む
5	2.5YR5/8 明赤褐色	シルト	あり	焼面
6	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	なし	灰化物、焼土ブロックをまばらに含む
7	7.5YR3/1 黒褐色	シルト	あまりなし	灰化物・焼土ブロックをまばらに含む
8	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	なし	品本層位4層

7号住居跡出土遺物観察表

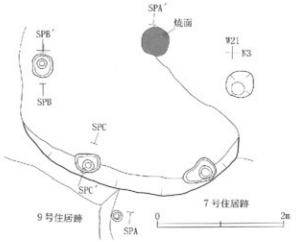
図版番号	出土地区・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	備考	写真図版
13−1	7号住・埋土	−	−	(△6.8)	低状連結文？（充填LR）	ミガキ		2016
13−2	7号住・埋土	−	−	(△7.2)	ミガキ	ミガキ		
13−3	7号住・埋土	−	−	(△3.2)	沈線間刻み目、粘土粒貼付	ミガキ？		
13−4	7号住・埋土	−	−	(△5.3)	穿孔	ナデ→ミガキ		2017
13−5	7号住・埋土	−	−	(△5.1)	磨消縄文RL3ｒ（一部充填）	ナデ→ミガキ		
13−6	7号住・4層	−	−	(△7.1)	平行沈線間刻み目、ナデ	ナデ		2018
13−7	7号住・4層	−	−	(△6.7)	LR→沈線区画、多条斜位沈線	ミガキ		2019
13−8	7号住・4層	−	−	(△4.2)	低状連結文（LR）？	ナデ？		
13−9	7号住・埋土	−	−	(△5.7)	磨消縄文LR	ナデ		
13−10	7号住・土壌埋土	−	−	(△4.7)	口縁部：沈線区画内刻み目	ミガキ	セクション図第3層	2020
13−11	7号住・土壌埋土	−	−	(△4.2)	突起間連結縄文、直線的羊歯状文、平行沈線、結束羽状縄文	ミガキ	セクション図第3層	
13−12	7号住・土壌埋土	−	−	(△6.2)	櫛歯状文（5本1組）	ミガキ	セクション図第3層	2021
13−13	7号住・土壌埋土	−	−	(△7.5)	沈線区画内充填LR	ミガキ？	セクション図第3層	
13−14	7号住・土壌埋土	−	−	(△5.3)	磨消縄文LR	ミガキ	セクション図第3層	
13−15	7号住・土壌埋土	−	−	(△4.7)	平行沈線、直線的羊歯状文、連続刺突、LR	ミガキ	セクション図第3層	2022

第13図　7号住居跡と出土遺物

［出土遺物］（第14図）

堆積土中より、遺物が出土している。

1～4が口縁部片、5～9が胴部片である。1は口縁部と頚部の平行沈線間に刻み目が施される。2、8は沈線区画内を磨消縄文によって施文するもので、2、6には粘土粒貼付けが見られる。3、4、7は平行化した羊歯状文が施文される。5には入組状の文様と刻み目が施文される。9は半肉彫状の磨消縄文となるものである。



号住居跡セクション図土層注記

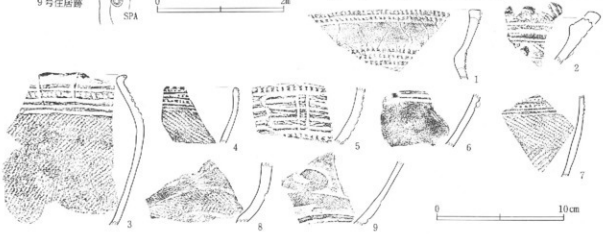
層	土色	土質	しまり	備考
1	10YR2/2 黒褐色	消滅シルト	あまりなし	炭化物粒、焼土粒をやや多く含む

南西隅柱穴セクション図土層注記(SPB～SPB′)

層	土色	土質	しまり	備考
1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	あり	
2	10YR2/1 黒色	シルト	あり	褐色(10YR4/6)の粒土をブロック状に含む

北西隅柱穴セクション図土層注記(SPC～SPC′)

層	土色	土質	しまり	備考
1	2.5Y2/1黒色	シルト	あり	
2	10YR2/2黒褐色	粘質シルト	あり	地山ブロックを含む



8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	出土地区・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	備考	写真図版
14－1	8号住・埋土	－	－	(△5.6)	平行沈線区画内刻み目	ナデ→ミガキ		
14－2	8号住・埋土	－	－	(△4.9)	沈線区画内磨消縄文（原体厚縄）	沈線、ミガキ		
14－3	8号住・埋土	－	－	(△12.2)	平行化した羊歯状文、LR	摩滅		
14－4	8号住・埋土	－	－	(△4.5)	平行化した羊歯状文、RL	ミガキ		
14－5	8号住・埋土	－	－	(△4.4)	入組状文、沈線区画内刻み目	ミガキ		
14－6	8号住・埋土	－	－	(△3.9)	平行沈線、粘土粒貼付け	ミガキ		
14－7	8号住・埋土	－	－	(△6.1)	平行化した羊歯状文、羽状縄文	ミガキ		
14－8	8号住・埋土	－	－	(△4.7)	沈線区画内磨消羽状縄文	ナデ		
14－9	8号住・埋土	－	－	(△5.3)	平両形状の磨消縄文	ミガキ		

第14図　8号住居跡と出土遺物

9号住居跡（第15図）

［位置・確認面］遺物包含層東地区（W23～29、S2～N2）遺物包含層3層下、4層上面。

［遺存状況］北側と東側を包含層等により削平され、約1／2のみ残存。

［重複］1号土壙、10号住居跡と重複し、1号土壙より新しく、10号住居跡より古い。

［包含層との関係］住居内堆積土が遺物包含層3層に覆われるため、これより古い住居跡である。

［平面形・規模］楕円形を呈すると推定され、規模は南北2.8m以上、東西6.2m以上となる。

［堆積土］2層堆積し、炭化物を含む。

［壁の状況］地山面を壁とし、残存壁高は最大約20cmで、ほぼ直立する。

［床面の状況］地山面、4層上面を床面とし、4層上面の一部に貼り床がみられる。

［炉］住居跡のほぼ中央と推定される部分に焼面を検出している。

［柱穴］径30～40cmほどの柱穴が4カ所検出されている。

［周溝］特に検出されていない。

［その他の住居内施設］特に検出されていない。

［出土遺物］（第16図）

堆積土中より遺物が出土している。1～16、22が口縁部、17～21が胴部片である。1、2、21、22には平行沈線区画内に刻み目が施される。3、17は隆帯を用いて施文するものであるが、17の隆帯上には刺突が施される。4、13、18は沈線区画内を磨消縄文で施文するもので、18は羽状縄文となる。16、19には平行化した羊歯状文が、20には半肉彫状の磨消縄文が見られる。

10号住居跡（第15図）

［位置・確認面］遺物包含層東地区（W23～26、S1～S3）遺物包含層3層下。

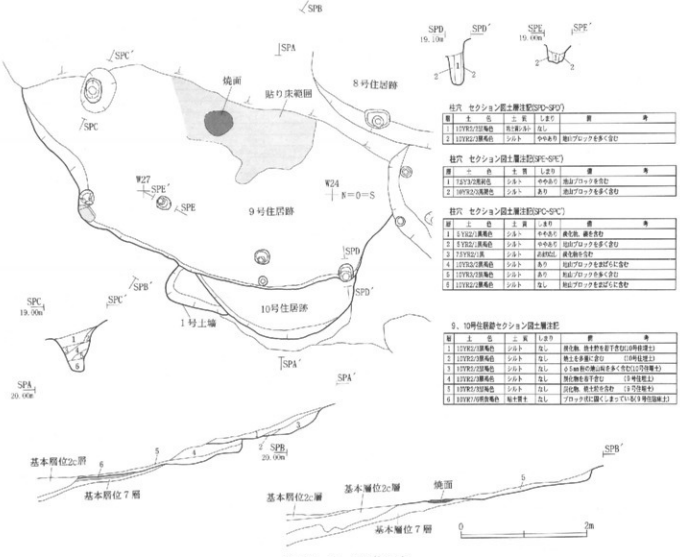
［遺存状況］北側を包含層等により削平され、約1/2のみ残存。

［重複］1号土壙、9号住居跡、11号住居跡と重複し、1号土壙、9号住居跡より新しく、11号住居跡より古い。

［包含層との関係］住居内堆積土が遺物包含層3層に覆われるため、これより古い住居跡である。

［平面形・規模］隅丸方形ぎみの円形を呈すると推定され、規模は南北2.6m以上、東西3.8m以上となる。

［堆積土］3層堆積する。3層は住居壁の崩落土と思われる。



柱穴 セクション図土層注記(SPD-SPD´)

層	土色	土質	しまり	備考
1	10YR3/3黒褐色	粘質シルト	なし	
2	10YR2/3黒褐色	シルト	ややあり	地山ブロックを多く含む

柱穴 セクション図土層注記(SPE-SPE´)

層	土色	土質	しまり	備考
1	7.5YR3/3黒褐色	シルト	ややあり	地山ブロックを含む
2	10YR2/3黒褐色	シルト	あり	地山ブロックを多く含む

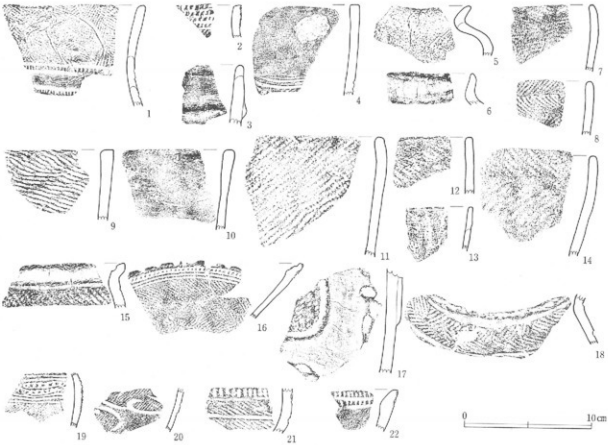
柱穴 セクション図土層注記(SPC-SPC´)

層	土色	土質	しまり	備考
1	10YR2/2黒褐色	シルト	ややあり	炭化物、焼土含む
2	5YR2/1黒褐色	シルト	ややあり	地山ブロックを多く含む
3	7.5YR2/1黒	シルト	非常に	炭化物を含む
4	10YR2/2黒褐色	シルト	あり	地山ブロックを20%ほど含む
5	10YR2/3黒褐色	シルト	あり	地山ブロックを多く含む
6	10YR2/2黒褐色	シルト	なし	地山ブロックを20%ほど含む

9、10号住居跡セクション図土層注記

層	土色	土質	しまり	備考
1	10YR2/3黒褐色	シルト	なし	焼土粒、炭土粒を若干含む(10号住埋土)
2	10YR2/2黒褐色	シルト	なし	焼土を多量に含む　(10号住埋土)
3	10YR2/2黒褐色	シルト	なし	φ5mm前の焼土粒を多く含む(10号住埋土)
4	10YR2/3黒褐色	シルト	なし	焼土粒を若干含む　(9号住埋土)
5	10YR2/3黒褐色	シルト	なし	炭化物、焼土粒を含む　(9号住埋土)
6	10YR3/4黒褐色	粘土質土	なし	ブロック状に固くしまっている(9号住掘埋土)

第15図　9、10号住居跡



9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	出土地区・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	備考	写真図版
16−1	9号住・覆土	−	−	(△8.1)	縦位羽状縄文(LR, RL)、沈線間刻み目	ミガキ		2023
16−2	9号住・覆土	−	−	(△2.5)	多条平行沈線間刻み目	摩滅		
16−3	9号住・覆土	−	−	(△4.0)	横位隆帯	ナデ		
16−4	9号住・覆土	−	−	(△7.2)	多条斜位沈線、ミガキ	ミガキ		
16−5	9号住・覆土	−	−	(△4.6)	LR？	ナデ		
16−6	9号住・覆土	−	−	(△2.6)	ナデ？	ナデ？		
16−7	9号住・覆土	−	−	(△5.1)	摩滅	ミガキ		
16−8	9号住・覆土	−	−	(△4.2)	羽状縄文(LR, RL)	ナデ		
16−9	9号住・覆土	−	−	(△5.6)	RL？？	ミガキ		
16−10	9号住・覆土	−	−	(△5.2)	ミガキ	ミガキ		
16−11	9号住・覆土	−	−	(△3.6)	LR？	摩滅		
16−12	9号住・覆土	−	−	(△9.3)	RL？	ミガキ		
16−13	9号住・覆土	−	−	(△3.4)	櫛歯状文？	ミガキ		
16−14	9号住・覆土	−	−	(△8.0)	羽状縄文（擬体摩滅）	摩滅		
16−15	9号住・覆土	−	−	(△3.6)	平行沈線、RL？	沈線、ミガキ		
16−16	9号住・覆土	−	−	(△4.3)	口唇部:刻み目、口〜胴部:平行沈線間刻み目、LR	平行沈線間刻み目、ミガキ		2024
16−17	9号住・覆土	−	−	(△8.3)	猛烈隆帯、刺突、RL	ナデ？		2025
16−18	9号住・覆土	−	−	(△4.2)	羽状縄文(LR, RL)→平行沈線	指押圧痕		2026
16−19	9号住・覆土	−	−	(△4.0)	羊歯状文、平行沈線	ナデ？		2027
16−20	9号住・覆土	−	−	(△3.6)	重畳文(LR)	ミガキ		
16−21	9号住・覆土	−	−	(△3.6)	RL→平行沈線→刻み目	ミガキ		
16−22	9号住・覆土	−	−	(△3.3)	平行沈線間刻み目	ミガキ		

第16図　9号住居跡出土遺物

［壁の状況］地山面を壁とし、残存壁高は最大約30cmで、ゆるやかに外傾する。

［床面の状況］地山面、9号住居跡堆積土上面を床面とする。

［炉］特に検出されていない。

［柱穴］特に検出されていない。

［周溝］特に検出されていない。

［その他の住居内施設］特に検出されていない。

［出土遺物］特に出土していない。

11号住居跡（第17図）

［位置・確認面］遺物包含層東地区（W22～25、S4～S5）遺物包含層３層下。

［遺存状況］包含層等により、約2／3のみ残存。

［重複］10号住居跡と重複し、これより新しい。

［包含層との関係］住居跡が遺物包含層３層に覆われるため、これより古い住居跡である。

［平面形・規模］円形を呈すると推定され、規模は南北2.0m以上、東西2.8m以上となる。

［堆積土］壁際に１層堆積するのみで、他は遺物包含層３層により削平される。

［壁の状況］地山面を壁とし、残存壁高は最大約10cmで、外傾する。

［床面の状況］地山面、10号住居跡堆積土上面を床面とする。

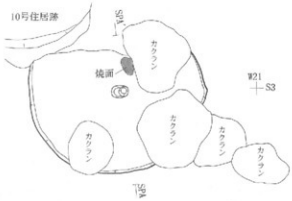
［炉］住居跡の北側に焼面と焼質化した土を検出している。

［柱穴］径10cmほどの柱穴が住居跡中央と推定される部分に検出されている。

［周溝］特に検出されていない。

［その他の住居内施設］特に検出されていない。

［出土遺物］特に出土していない。



11号住居跡セクション図土層注記

層	土色	土質	しまり	備考
1	10YR3/4暗褐色	シルト	あまりなし	焼土、炭化物粒を含む
2	10YR3/2黒褐色	シルト	ややあり	炭化物を含む
3	2.5YR4/6赤褐色	シルト	あり	焼面
4	10YR5/3灰黄褐色	シルト	あり	焼質化し、固くしまっている

第17図　11号住居跡

12号住居跡（第18図）

［位置・確認面］遺物包含層東地区（W29～33、N1～N3）遺物包含層３層下。

［遺存状況］住居南半のみ検出、北半の状況は調査区外のため不明である。

［重複］特に重複関係はない。

［包含層との関係］住居内堆積土が遺物包含層３層に覆われるため、これより古い住居跡である。

［平面形・規模］円形を呈すると推定され、規模は南北2.3m以上、東西3.8m以上となる。

［堆積土］３層堆積し、３層は住居壁の崩落土で礫を含む。

［壁の状況］地山面を壁とし、残存壁高は最大約30cmで、外傾する。

［床面の状況］地山面、４層上面を床面とする。

［炉］住居跡のほぼ中央と推定される部分に焼面を検出している。

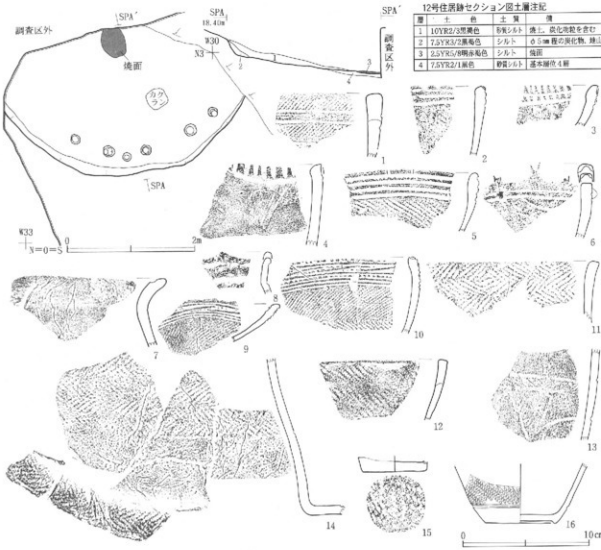
［柱穴］壁際に柱穴が数カ所まわる。

［周溝］特に検出されていない。

［その他の住居内施設］特に検出されていない。

［出土遺物］堆積土より、遺物が出土している。1～12は口縁部片、13～14は胴部片、15～16は底部片である。1、6、13は沈線区画内を磨消縄文で施文するもので、6には粘土粒貼付けが見られる。

2、5は口縁部に数条の平行沈線を施文するもので、下部は地紋のみとなる。3、4は、口縁部に刻み目を施すものである。9、10は口縁部に三叉状文が施される。15は、底部に網代痕が残存する。16は胴下部が沈線区画され、ミガキにより無文となる。



12号住居跡セクション図土層注記

層	土色	土質	備考
1	10YR2/3黒褐色	有機シルト	焼土、炭化物粒を含む
2	7.5YR3/2黒褐色	シルト	φ5mm程の炭化物、焼土粒、礫を含む
3	2.5YR5/8明赤褐色	シルト	焼面
4	7.5YR2/1黒色	粘質シルト	基本層位4層

12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	出土地区・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	備考	写真図版
18-1	12号住・埋土	－	－	(4.5.0)	平行沈線間磨消縄文LR	ナデ		
18-2	12号住・埋土	－	－	(4.5.3)	口唇部：刻み目、平行沈線、摩滅	ミガキ		
18-3	12号住・埋土	－	－	(4.5.3)	口縁部：平行沈線間刻み目	ミガキ		
18-4	12号住・埋土	－	－	(4.6.3)	口縁部：平行沈線間刻み目	ミガキ		
18-5	12号住・埋土	－	－	(4.4.7)	多条平行沈線、RL	ミガキ		
18-6	12号住・埋土	－	－	(4.5.3)	平行沈線、弧状磨消文？、粘土粒貼付	ナデ	口縁部大小突起	2028
18-7	12号住・埋土	－	－	(4.5.3)	ナデ	ミガキ		
18-8	12号住・埋土	－	－	(4.5.3)	平行沈線	摩滅	口唇部突起	
18-9	12号住・埋土	－	－	(4.4.8)	羊歯状文、平行沈線、LR	平行沈線間刻み目、ミガキ		
18-10	12号住・埋土	－	－	(4.6.0)	口縁部に刻み目、羊歯状文、平行沈線、羽状縄文(LR, RL)	ミガキ		2029
18-11	12号住・埋土	－	－	(4.4.2)	羽状縄文（LR, RL）	ミガキ		
18-12	12号住・埋土	－	－	(4.5.0)	RL	ミガキ		
18-13	12号住・埋土	－	－	(4.7.4)	弧状沈線？、縄文原体	ナデ		2030
18-14	12号住・埋土	－	－	(4.12.0)	羽状縄文（LR, RL）	ナデ？		
18-15	12号住・埋土	－	－	4.1.2	底部：網代痕	不明		
18-16	12号住・埋土	－	－	4.4.3	RL、平行沈線	ミガキ		

第18図　12号住居跡と出土遺物

(2) 遺物包含層＜東地区＞（第６図）

遺物包含層は、前述のとおり調査区東側にあって北に向かって緩やかに傾斜する谷地に分布する。調査区南部と北部での地山面の落差は幅約12mで４mであり、約20～30°で傾斜する。遺物包含層の範囲は調査区東部南側から北側にむかって堆積を始め、調査区北側では、最高約80cmの厚さとなり若干傾斜が緩くなる傾向がある。層内は、遺物とともに礫が含まれ、小破片の遺物が多い。遺物は層内にほぼ均一に散布する。

出土の遺物の大半は縄文土器の破片資料であり、その他に土製品、石製品などがある。

【土　器】今回は、遺物包含層東地区の口縁部片と主な遺物389点について取り扱うこととし、その他は本報告に譲ることとしたい。遺物包含層出土土器は、文様をもつものと地紋のみのものに分類され、文様をもつものでは、深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、壷形土器、注口土器などがある。地紋のみのものとしては、深鉢形土器がほとんどであるが、鉢形土器もみられる。出土遺物の大半がこの文様をもたず地紋のみとなる土器である。以下、遺物包含層の層序毎に遺物について述べる。

遺物包含層１層（基本層位１層）出土土器（第19、20図）

１．文様をもつもの

＜深鉢形土器・鉢形土器＞

［胴部から口縁部にかけて外傾しながら直線的に開く、又は口縁部付近で軽く内湾する器形のもの］（第19図１～34）

１は、渦巻き状？の隆帯貼り付け後、棒状の工具により円形刺突を施すものである。

２～13は口縁部または胴部に磨消縄文・充填磨消縄文によって施文されるもので、２、６は口縁部の形状（波状・山形）に沿って沈線区画された内部に施される。３、４、７～９は平行沈線により区画された内部に施される。10は、縦長の楕円文内に縄文が充填される。

14～20は、口縁部～胴部にかけて平行沈線区画内に刻み目が施されるものである。１段のみのもの（14、15）から多段のものがある（16～20）。14～19は、平行沈線に用いたものとほぼ同様の工具で刻み目が施されるのに対して、20は、沈線に使用した工具とは別の先細の工具により刻み目が施される。

21～28は、胴部～口縁部付近で内湾し、口縁部～胴部にかけて羊歯状文、平行化した羊歯状文、平行沈線が、胴部に縄文が施文されるものである。口唇部に刻み目や突起間弧状右下がり横走弧文が施文され、小波状口縁を呈するものもみられる。

29～31は、21～28と同様に胴部～口縁部付近で内湾し、平行化した羊歯状文下に、半肉彫状の磨消縄文が施文されるものである。

32は、玉抱三叉文？が施文される。33、34は、多条の平行沈線区画内等に瘤状の粘土粒貼り付けがなされるものである。

［胴部または口縁部～胴部にかけて屈折するもの］（第19図35～44）

35は、縦長の楕円文、平行沈線間に磨消縄文が施文される。口縁部の突起頂部に刻み目をもつ大小の突起が交互に配される。

36は、口唇部に刻み目が、口縁部～胴部にかけて入組状文が施文される。

37は、隆帯上に粘土粒貼り付け、さらに円形刺突が施される。

38～40は、口縁部～胴部屈折部分にかけて、羊歯状文が施文される。

41～44は、外傾して開いた後、胴部上半で内湾し頚部で屈折して口頚部で外反するものである。口唇部に刻み目が施され、口頚部が無文帯となり頚部には胴部と区画する平行沈線等が巡る。41～43は、頚部に平行沈線が1～2条巡るのに対し、44は平行沈線と刻み目帯が巡る。

＜浅鉢・皿形土器＞（第20図1～17）

1、2は、地紋施文後に入組状文（4）、重弧文？（2）が施文される。

3～5、10は、口縁部に沿って平行沈線が区画された後、刻み目が1～2段に施されるものである。特に3、4は縄文（3）、羽状縄文（4）が縦位施文される。

6は、口縁部に沿って平行沈線が区画された後、竹管状の工具により連続刺突が施される。

7は、口縁下に平行沈線が1条巡る。8は、口縁部に平行化した羊歯状文、平行沈線が施文される。

9は、弧状連結文が施文される。

11、12は、口縁部に直線的羊歯状文、胴部に半肉彫状の文様が施文される。

13は、胴部上半で屈折し、口頚部の平行沈線区画内に穿孔（一部未穿孔）が上下交互になされ、それらを弧文によって連結している。

14～17は、胴部に半肉彫状の磨消縄文が施文されるものである。14は、口縁内部に刻み目を充填する平行沈線が巡る。15は、口縁部に4カ所突起が配される。

＜壺形土器＞（第20図18～21）

18～20は、胴部上半まで内傾し、屈折してやや内傾して立ち上がる頚部をもち、口縁部でさらに屈折して外反・外傾する壺形土器である。20は、頚部に沈線が1条巡る。

21は、頚部で屈折して外傾する口縁部をもつ壺形土器である。

＜その他＞　第20図22は、台部の破片と思われるものであるが、小破片のため不明である。

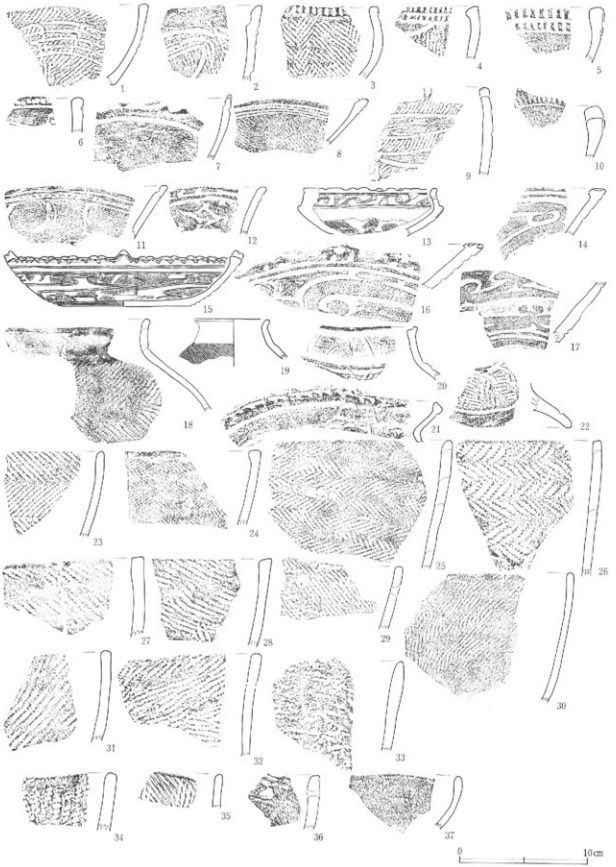
2．文様をもたないもの

第20図23～37は、文様をもたず地紋のみで施文される粗製の深鉢形土器であり、底部からかるく内湾ぎみに外傾して立ち上がるものである。

23～35は、地紋のみ施文されるものである。羽状縄文（23～26）、RL（27、29、34）、LR（31、32）、RL3r（28、35）、LR＋L（30）、RLR（33）等が施文される。33は波状口縁に、34は縦位で節の大きな地紋が施文される。

36、37は、無文となるものである。36は口縁部直下に穿孔されている。

第19図　遺物包含層東地区１層出土土器



第20図　遺物包含層東地区１層出土土器

遺物包含層２層（基本層位２ａ層）出土土器（第21～25図）

１．文様をもつもの

＜深鉢・鉢形土器＞

［胴部から口縁部にかけて外傾しながら直線的に開く、又は口縁部付近で軽く内湾するもの］

（第21図～第22図23）

第21図１は、渦巻状の沈線文をもつものである。

２～５は、粘土紐によって隆帯を構成するものである。渦巻状隆帯文（2）、隆帯上に刺突を縦位に施すもの（3）などがある。

６は地紋のみ胴部に施文されるが、口縁頂部に３条の平行沈線をもつ突起を有するものである。

７～18は、沈線区画された部分を磨消縄文・充填磨消縄文によって文様を構成するものである。７は、口縁部に大小の突起が交互に配されており、大突起は３ツ又に分かれている。胴部には、円形の整えられた粘土粒の貼り付けがなされる。12は、弧文の組み合わせにより施文される。13～15は、口縁部に沿って沈線で区画された内部に２条１組で山形状の文様を描き、磨消縄文を行うものである。16は、平行沈線間に施文される。17は、弧文で区画された内部を羽状縄文により充填施文する。

19～28は、口縁部に沿って区画した平行沈線間に刻み目を充填するものである。山形の波状口縁部となるもの（19、20）、波状口縁部となるもの（21、22）、平坦口縁部となるもの（23～33）があり、刻み目も１段～多段になるものや、磨消縄文・充填磨消縄文と共に文様が構成されるもの（29～33）などがある。

34～38は、瘤状の粘土粒貼り付けをするものである。弧状連結文（磨消縄文ＬＲ）で文様を構成するもの（34、37）、多条の平行沈線によって文様を構成するもの（35、36、38）がある。

第22図１～23は、外傾して開いて立ち上がった胴部が口縁部付近で軽く内湾する器形をもつものである。胴部に地紋（ＬＲ、ＲＬ、羽状縄文）のみ施文されるもの（１～18）、半肉彫状の磨消縄文が施文されるもの（19、20）がある。胴部に地紋のみ施文されるもので口縁部～胴部の内湾する部分は、平行沈線で区画した内部を、平行沈線（１～５）、羊歯状文（６～10）、平行化した羊歯状文（11～14）が施文される。21、22は、口縁部～胴部に玉抱三叉状文が施文される。

［体部または口頸部付近で屈折する器形をもつもの］（第22図24～第23図17）

第10図24は多条の平行沈線を施文した後、粘土粒貼り付けされるものである。

25、26は粘土帯貼り付けにより横位、弧状隆帯を施すものである。横位隆帯に沿って連続刺突、口縁突起部分に穿孔が施される。27は、口縁部の波状となる部分に２組１対で穿孔が施される。28は、把手状の粘土貼り付け、横位隆帯が施される。29はＲＬ縄文が縦位施文される。30は横位に連続した四角内を台状にし、ＬＲ縄文を充填する。31は、口頸部を平行沈線、平行沈線間連続刻み目で区画した内部に文様を施すものである。羽状縄文が縦位施文される。33は、口頸部に工字状文、胴部上半に入組み状の文様が施される。34、35は、口縁～胴部に羊歯状文が施文される。36～38は、胴部に半肉彫状の磨消縄文が施文される。

第23図１～17は、胴部上半で軽く内湾した後、頸部で屈折して外反して口縁部が立ち上がる器形である。口頸部が無文帯となり、頸部には胴部との区画をする平行沈線等が巡る。１～８は、頸部に平行沈線のみ施文されるものである。１～５が口縁部が小波状口縁部を呈するのに対し、６～８は口唇部に刻み目が加えられる。９～13は、頸部に平行沈線の上部に刻み目が施文される。13は、羽状縄文を地紋とする。14も９～13と同様に頸部に平行沈線と刻み目が施文されるが、９～13よりも先の丸い工具により浅く刻み目を施文する。15～17は、口頸部が無文となるものであるが、ミガキにより胴部の地紋が施文される部分と段差がつく。また、1～14よりも長く立ち上がる頸部をもち、口縁部付近でさらに屈折して外反する。

＜浅鉢・皿形土器＞

［胴部から口縁部まで直線的に開く、もしくは口頸部で内湾する器形をもつもの］（第23図18～41、第24図１～５）

18～20は、平行沈線などで区画された内部を充填縄文するものである。18、19は、山形となる突起をもつ。特に19は粘土粒の貼り付けがなされる。

21は、口縁部に平行化した羊歯状文が、胴部に浅い半肉彫状の充填磨消縄文（ＲＬ）が施文される。

第23図22～30は、沈線、磨消縄文、刻み目によって文様が構成されるものである。22～26は、平行沈線、入組状文等で沈線区画された内部に縄文を充填する。22～25は、頂部を二分する山形突起を持つ。27は、弧状文の区画内に羽状縄文が充填施文される。28、29は、沈線区画内に刻み目が充填される。30は、重弧状沈線文、平行沈線で文様が施文され、把手状？を呈する粘土貼り付けがされる。

31～40は、胴部の文様が半肉彫状の磨消縄文で構成されるものである。41も同様の器形をもつが文様をもたず、ミガキにより無文となる。31～34は、口縁内部に刻み目または平行沈線＋充填刻み目が施される。39は胴部内面にＬＲの充填？縄文帯を一部残して、ミガキを行うものである。40は、他に比べ口径の大きな浅鉢形土器になるものと推定され、胴部上半の平行沈線区画内に浅い半肉彫状の磨消縄文が施文される。

第24図１～４は、口縁部外面に平行化した羊歯状文を施すものである。胴部は縄文ＬＲ（２）、羽状縄文（１、２、４）が施文される。１～３の口縁部内面には、外面と同様に平行沈線間に刻み目が施文される。

５は、摩滅により不明な点もあるが、胴部の半行沈線区画内に工字状？文が施文される。

＜壺形土器＞

［内傾した胴部が、頸部で屈折して口頸部が外反・外傾して立ち上がるもの］（第24図６～８）

いずれも口頸部はミガキにより無文となり、胴部には地紋のみ施文される。

［頸部が内傾して立ち上がり、さらに口縁部付近で屈折し外反するもの］（第24図９）

胴～頸部に平行化した羊歯状文が施される。胴部は残存せず不明である。

［細長い頸部をもつもの］（第24図10、11）

10は頸部が直線的に内傾し、屈折して口縁部が外傾し開くものである。口縁端部外面に沈線が1条巡る。11は外反ぎみに開く口頸部をもち、口縁部外面と口縁部内面に1条の沈線が巡る。

［口頸部が、外反ぎみにほぼ直立して立ち上がるもの］（第24図12～15）

12～14は口縁部外面または口縁端部に沈線が１～２条巡る。12は口縁部に小突起が２個１対で付く。15は胴～口縁部にかけて多条の平行沈線を施文し、さらに口縁部と頸部の平行化した羊歯状文が施文され、口縁部が小波状口縁を呈するものである。

＜注口形土器＞

第24図16～20は、注口土器の破片と思われるもので、16～18は口縁部片、19、20は胴部屈折部分である。16～19は平行化した羊歯状文が、口縁部や屈折部分に施文される。20は平行沈線と弧文によって文様が構成され、屈折部分に刻み目が施される。いずれも小破片のため器形がはっきりしないが、口縁部形態により以下のとおり分類される。

口縁部で屈折・外傾するもの（第24図16）、口縁部で屈折・外傾した後、さらに屈折・内傾するもの（第24図17）、口頸部で屈折し、口縁部が長く開いて外傾するもの（第24図18）

２．文様をもたないもの

第25図１～32は、文様をもたず地紋のみのもの、無文となるものまたは櫛歯状沈線などが施文される粗製の深鉢形土器であり、底部からかるく内湾ぎみに外傾して立ち上がる器形をもつものである。

１～26は、地紋のみ施文されるものである。羽状縄文ＬＲ・ＲＬ（１～９、23、24）、単節斜縄文ＲＬ（10～13、25、26）、ＬＲ（14～17）、0段多条ＲＬ３ｒ（18）、ＬＲ３１？（19）、複節斜縄文ＲＬＲ（20）、ＬＲＬ（21）、付加条縄文ＬＲ＋Ｌ？（22）が施文される。

６～８は、穿孔がなされている。９は、羽状縄文施文後に付いたと思われる人指し指～小指までの指圧痕が残る。

23～26は地紋が縦位で施文されるものである。23、24は羽状縄文が、25、26はＲＬが縦位で施文される。

他に、ミガキのみ施され無文となるもの（27～28）、竹管状工具により施文されるもの（29）、櫛歯状工具により施文されるもの（30～32）がある。

遺物包含層３層（基本層位２ｃ層）出土土器（第26～29図）

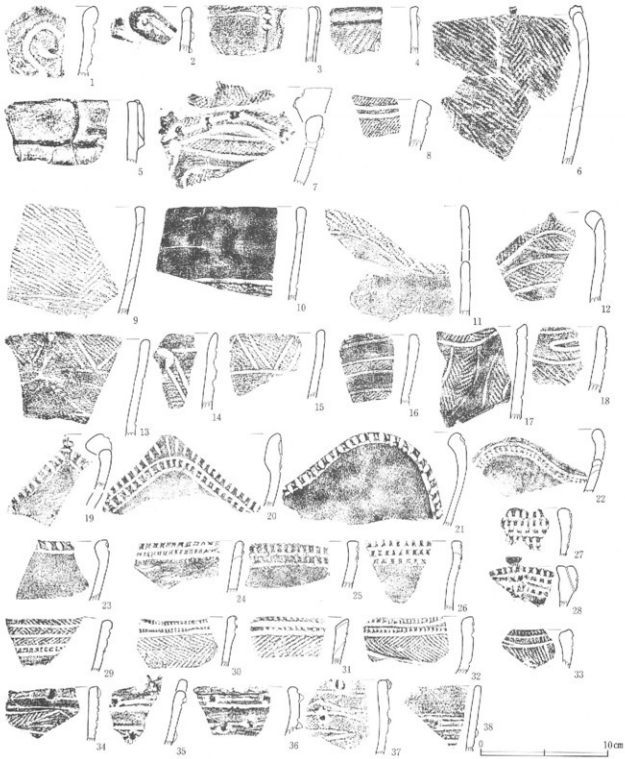
1．文様をもつもの

＜深鉢・鉢形土器＞

［胴部から口縁部にかけて外傾しながら直線的に開く、又は口縁部付近で軽く内湾するもの］

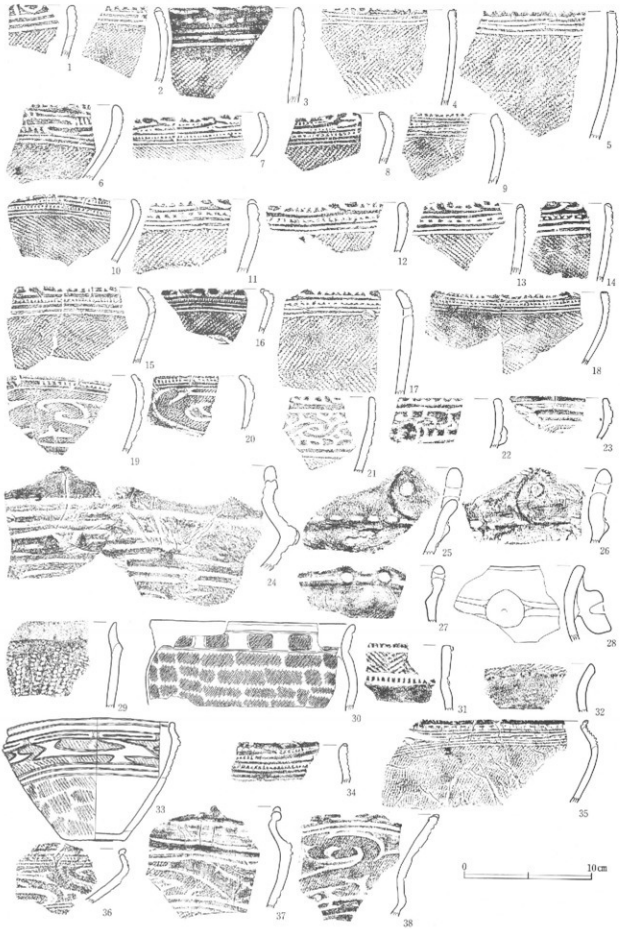
（第26図）

１～８は、隆帯、刺突、渦巻き文などにより文様を構成するものである。

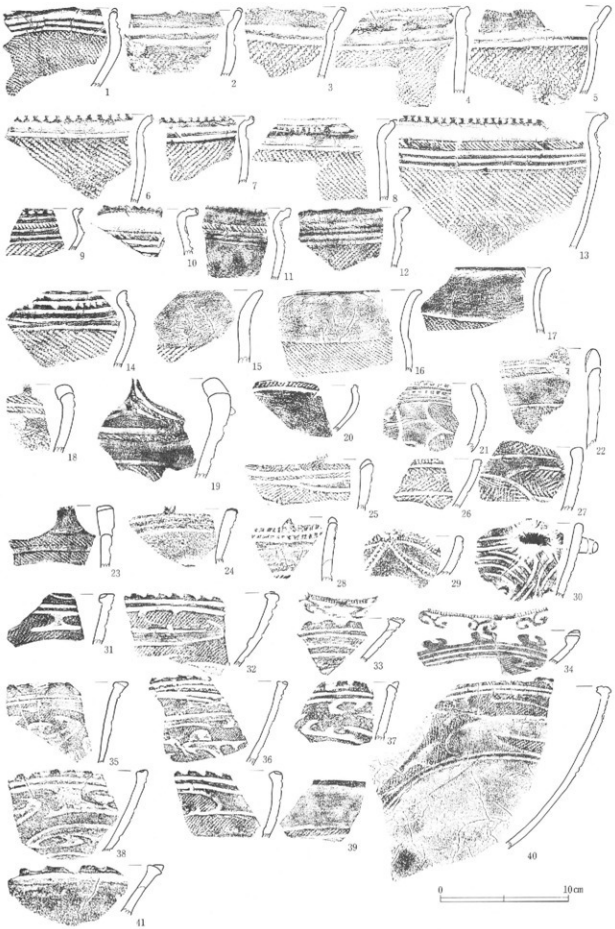


第21図　遺物包含層東地区２層出土土器

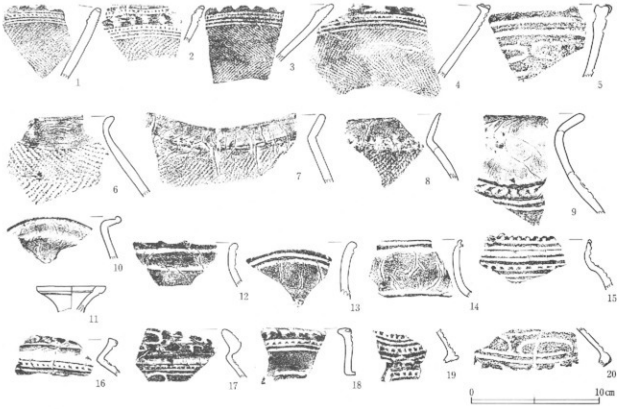
１～３は、口縁部外面に粘土紐により１～２条の横位隆帯が施されるものである。１は横位隆帯が１条巡り、隆帯より上部は無文、下部はＬＲＬ？を地紋として沈線文が描かれる。２は、波状口縁をもち、その口縁に沿って「コ」字状の隆帯が施される。小破片のため他の文様は不明である。３は、１と同様に１条隆帯が巡るが、破片の端で反転し口唇部で消えるものである。胴部には地紋が施文され、その後に弧状の「コ」字状沈線文が磨消技法により描かれる。４、５は、縦位に長楕円形を呈する刺突



第22図　遺物包含層東地区２層出土土器



第23図　遺物包含層東地区２層出土土器



第24図　遺物包含層東地区２層出土土器

を施すものである。どちらも波状口縁頂部の下に刺突するものであるが、４は口縁部に先の尖った工具により円形刺突を施す。６～７は、文様施文後に４と同様の円形刺突をするものであるが、７は文様に渦巻き文が施文される。９、10は文様施文後に穿孔されるものである。小破片・摩滅のため文様構成は不明であるが、10は波状口縁部を呈する。

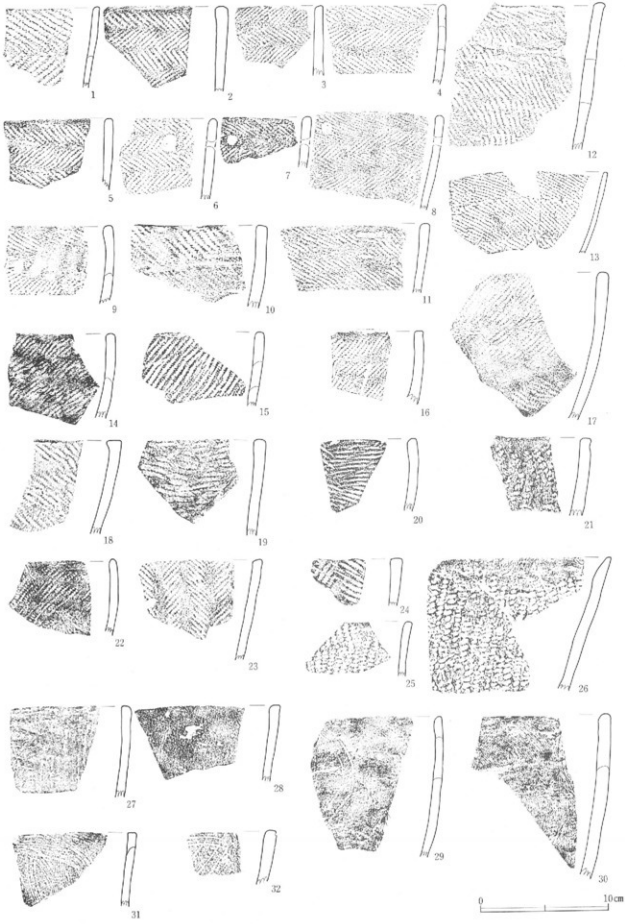
11～21は、口縁部または胴部の沈線区画内に、磨消縄文・充填磨消縄文によって文様を構成するものである。11、12は、縄文の上に垂斜位沈線が施文される。13は、横位沈線を1条施文した後、コの字状沈線が連続して巡り、その区画内を残して磨消しがなされる。14～16は平行沈線を基調として施文されるものである。15は、平行沈線・弧文による区画がなされる。

17～21は、縄文施文後に沈線で文様が施文されるものである。17、19は羽状縄文、20、21は撚糸文を地紋として、沈線により文様が施文される。20は、円文が施文される。

22～31は、沈線区画内に沈線と同様の工具により刻み目を施すものである。22～27は、いずれも波状口縁を呈し、沈線・刻み目以外は無文となる。28～31は、地紋施文後、沈線・刻み目が施される。地紋には、縦位羽状縄文（ＬＲ・ＲＬ）（28）、ＲＬ３ｒ？（29）が見られ、31は平行沈線区画内にＬＲ縄文と刻み目が充填施文される。

32～36は、瘤状の粘土粒貼り付けをするものである。いずれも沈線区画内を磨消縄文技法によって文様が構成される。

37～45は、外傾して開いた胴部が口縁部下で軽く内湾し、口縁部に羊歯状文（37～39）、平行化した羊歯状文（40～45）が施される。44、45の胴部には半肉彫状の磨消縄文がみられる。



第25図　遺物包含層東地区２層出土土器

［体部または口頸部付近で屈折する器形をもつもの］（第27図１～28）

１～８は、粘土帯・粘土粒によって文様を構成するものである。頸部と胴部の境などに横位に粘土帯・粘土粒貼り付けがなされる。胴部には地紋が施文されるが、いずれも小破片のため不明である。充填ＬＲ縄文（4）、ＲＬＲ？縄文（8）などがある。口頸部には、渦巻状沈文（1）、連続刺突（2）、穿孔（6）、円形粘土貼付け（7）などが施される。

９～13は、沈線区画内を磨消縄文（ＬＲ、ＲＬ、羽状縄文）で施文するものである。平行沈線と弧文を組み合わせたもの（9）、弧状連結文？（10）、平行沈線文（11、13）等で沈線文が施される。12は、頸部に無文帯を残しＲＬ縄文を施文するものである。

14～24は、口頸部に沈線による文様を施し、胴部以下に地紋が施文されるものである。14は、口頸部に羊歯状文を施すものであり、15～24は口頸部が無文帯となり頸部と胴部の境を区画する平行沈線等が施文されるものである。15～17は1～3条の平行沈線を、20～24は平行沈線を4～5条施文した後、最上部の平行沈線間に連続した刻み目を施すものである。刻み目は、先の薄いヘラ状の工具によって左やや下から数回の刻み目を1単位として施される（23、24）。又、口唇部には刻み目・平行沈線、口縁内部に１条の平行沈線が施される。

25～27は、胴部に半肉彫状の磨消縄文が施文されるもので、地紋に細かい節のＬＲ縄文が見られる。

28は、口頸部に「Ｓ」字状の沈文が連続して横位に巡るものである。地紋はＬＲ縄文である。

＜浅鉢・皿形土器＞

［胴部から口縁部にかけて直線的に開く、もしくは軽く内湾しながら大きく開くもの］

（第27図29～41、第28図１～10）

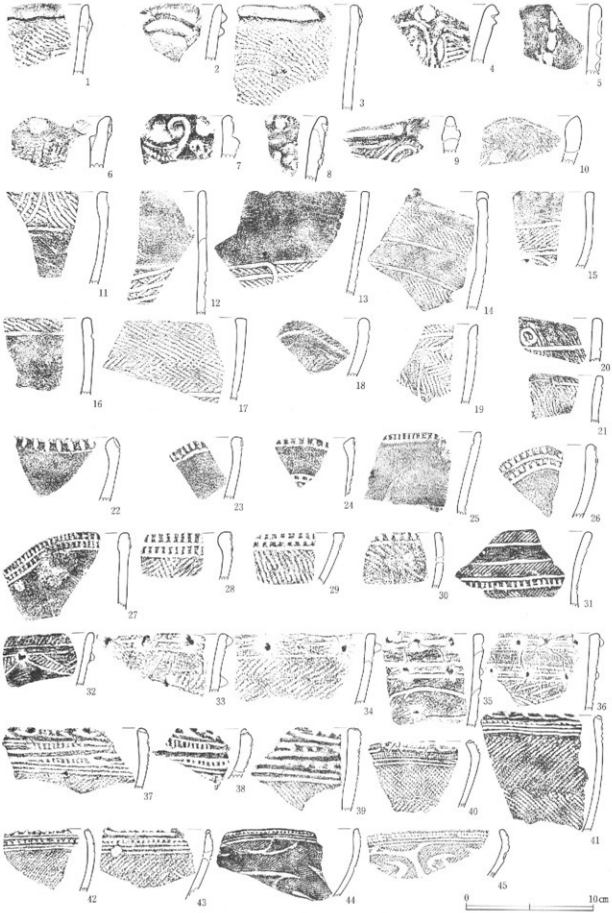
29～35は、口縁部に突起、もしくは大きな山形状の口縁部となるものである。29～33は、弧状連結文や平行沈線文により文様を構成する。特に29、32は、突起下部の口縁部外面に粘土粒の貼り付けが見られる。34は無文に、35は平行沈線のみ巡る。36は、口縁部外面に２条の平行沈線を巡らした後、連続した刻み目を施すものである。37は、平行沈線文と弧文により文様を構成するものであるが、小破片により不明である。38は、胴下部の平行沈線で区画された内部に、重弧状の沈線で斜位沈線を施文するものである。39は、口縁部に重弧状の斜位沈線文を施文するものである。40は、玉抱状三叉文が施文される。

第28図１～６は、口縁部内外面に平行化した羊歯状文を施すものである。口唇部には沈線文により文様が施文される。７～10は、胴部に半肉彫状の磨消縄文が施文される。

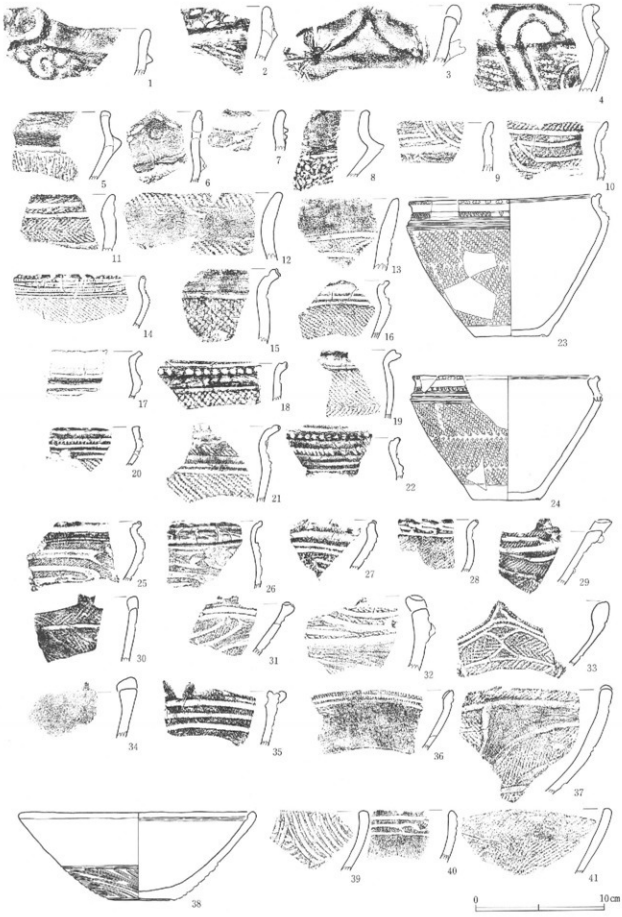
＜壺形土器＞

［頸部で屈折した後、口頸部がほぼ直立して立ち上がるもの］（第28図11～13）

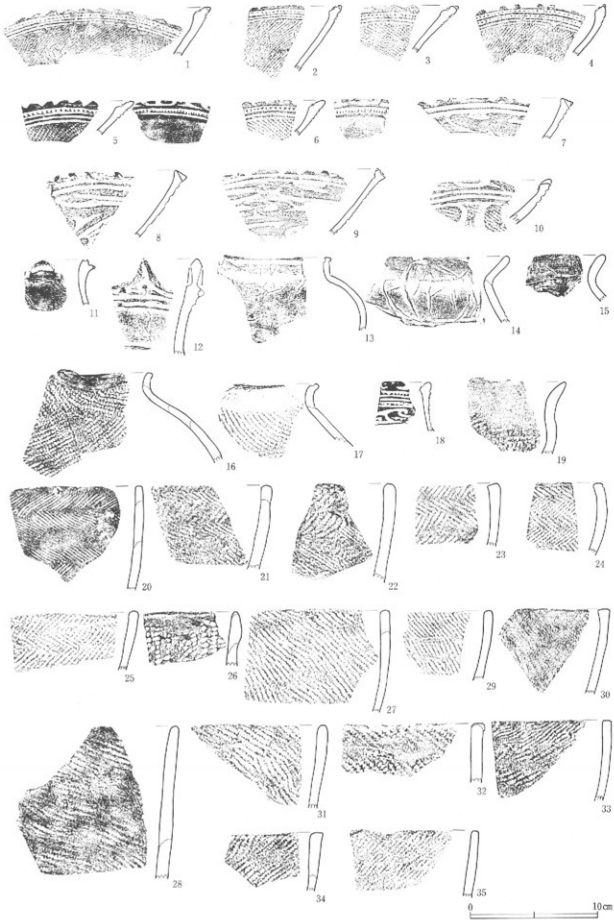
11、12は、粘土粒貼付けがなされる。12は、山形状の突起を有する。13は、口縁部と頸部に平行沈線が巡る。



第26図　遺物包含層東地区３層出土土器



第27図　遺物包含層東地区３層出土土器



第28図　遺物包含層東地区３層出土土器

第29図　遺物包含層東地区３層出土土器

［頚部で屈折した後、口頚部が外傾・外反して立ち上がるもの］（第28図14～17）

14は、頚部下に平行沈線が巡る。16、17は、胴部が地紋（羽状縄文ＬＲ・ＲＬ）のみ施文される。

＜注口土器＞（第28図18）

口縁部の小破片のため文様がはっきりしないが、羊歯状文？、三叉文が施される。

２．文様をもたないもの

第28図19～35、第29図1～18は、地紋のみ、もしくは櫛歯状の工具により施文される粗製の深鉢形土器である。

［胴部上半で軽く屈折し、軽く外反して開く頚部をもつもの］（第28図19）

外面はＬＲ縄文が施文されるが、口頚部は無文となる。

［胴部から直線的、もしくは軽く内湾ぎみに開いて立ち上がるもの］（第28図20～35、第29図1～18）

第28図20～第29図8は地紋のみ施文される。羽状縄文（ＬＲ・ＲＬ）が施文されるもの（第28図20～25）、RL縄文が施文されるもの（第28図26、27、29～32）、LR縄文が施文されるもの（第28図28、33～35、第29図1～3）があり、その他にRLR？、R？、LR31？、RL3r？など（第29図4～8）で施文される。

第29図9～13は、半截竹管状工具もしくは櫛歯状工具により施文がなされるものである。

第29図14～18は、ミガキなどのみで無紋となるものである。

【土　製　品】

東地区で出土した主な土製品には、土偶、スタンプ状土製品、玉状土製品、不明土製品、小型土器、円盤状土製品などがある。

［土偶］（第30図１～６）１～５は、それぞれ土偶の体部破片の１部であり、包含層１～２層で出土している。１は左腕の肩～手首付近の破片であり、肩部の破片部の一部にアスファルト痕跡が残存する。また、沈線間に竹管状工具の刺突を行う施文が３ケ所みられる。２は、胸部の破片である。乳首部分を粘土粒貼付けにより表現している。３は、部位不明である。腕もしくは足の一部と推定される。ＬＲ縄文施文の後、沈線で区画しており、また粘土粒の貼付けが見られる。４は、左足部の破片である。ＬＲ縄文と沈線で施文される。また、細い沈線により足の指先を表現している。５は、右足部分の破片である。膝の辺りと推定される部分に、沈線区画内を磨消縄文ＬＲにより施文している。体部との破片部分にアスファルト痕跡が見られる。６は、板状土偶の体部片と思われる。乳房を粘土粒貼付けにより表現し、表には竹管状工具により刺突で十字状に、裏には沈線と刺突で渦巻き状に施文を行う。

［スタンプ状土製品］（第30図７）人形状を呈し、下半部が底がほぼ平坦となる球状となる。上半部と下半部を沈線が１条巡って区画され、上半部はＬＲ縄文施文後、沈線で十字状に施文される。下半部は整形時の指押圧痕跡がみられる。

［玉状土製品］（第30図８）玉（球）状を呈するが約1／2のみ残存している。ＬＲ縄文を施文後、沈線により平行沈線や三叉文などの文様が施文される。又、頂部から下部にかけて角状の工具で穿孔がなされている。

［不明土製品］（第30図９、10）いずれも破片資料であり、形・部位を特定できないものである。９はミガキにより無文となり、10は沈線と刺突で文様が施される。

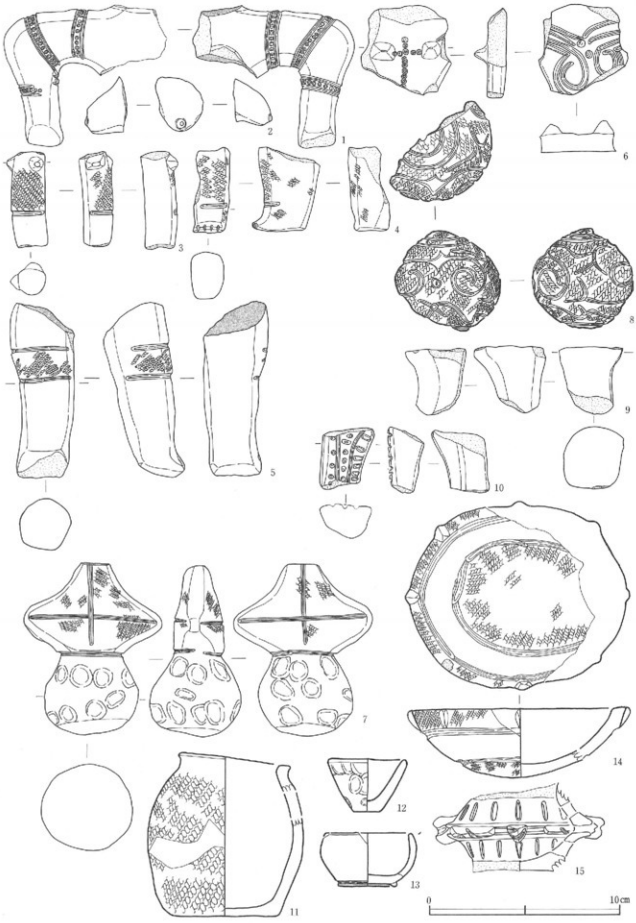
［小型土器、その他の土器］（第30図11～15）

小型の土器として鉢形土器（11）、手捏土器（12、13）がある。11は底部から内湾して立ち上がる胴部をもち、頚部で屈曲して短く外反する平坦口縁部となるものである。ＬＲ縄文により地紋が施される。12は、指押圧痕が残り、13はナデで調整され、底部が小さく台状となる。14は、丸底で平面形が楕円となる皿状土器である。約1／2のみ残存する。平行沈線とＬＲ縄文によって施文され、口縁部外面には粘土粒の貼付けが見られる。15は、香炉形？土器の破片資料と思われる。ミガキによって調整がなされる。

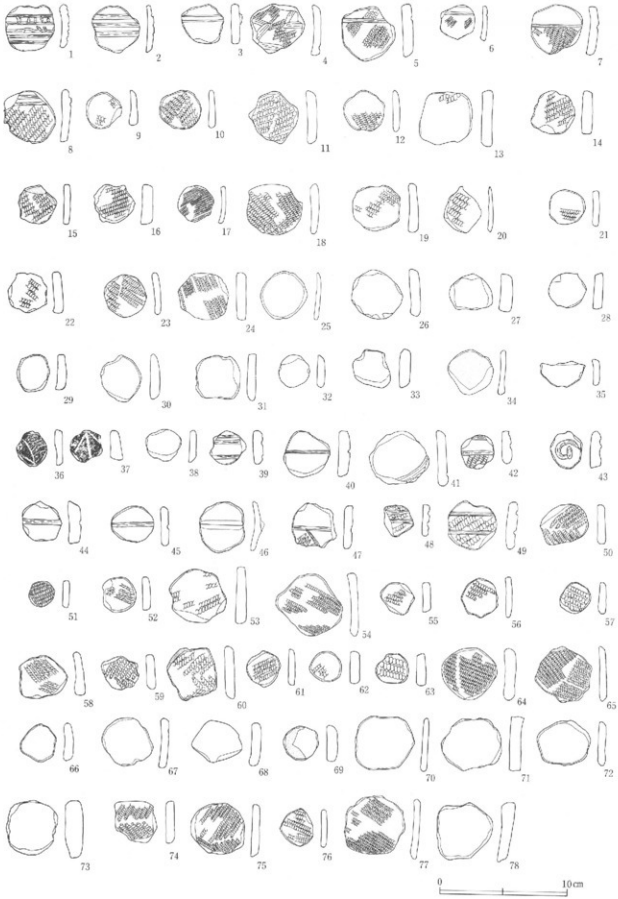
［円盤状土製品］（第31図）遺物包含層１～３層で78点出土している。平均で33～34mm の大きさ、7～15ｇである。縁部が破損や摩滅しているものが多い。

１～38は、包含層1層からの出土である。１～８は、沈線、刺突、粘土紐貼付けなどにより文様が施文されるが、いずれも小さな資料のため文様構成等不明である。９～23は地紋のみ施文され、ＬＲ、ＲＬ、羽状縄文、ＲＬ3ｒ？、撚糸文（Ｌ？）が見られる。24～38は、無文となるもので、殆どが摩滅により調整等不明である。36、37には木葉痕が見られる。

39～73は、包含層２層からの出土である。39～49は、平行沈線、渦巻文、粘土紐貼付けによって施文がなされる。いずれも小さな資料のため文様構成等不明である。50～65は地紋のみ施文される。Ｌ



第30図　遺物包含層東地区出土土器



第31図　遺物包含層東地区出土土器

R、RL、羽状縄文、撚糸文Lが見られる。66～73は、無文となるもので、殆どが摩滅により調整等不明である。

74～78は、包含層3層からの出土である。74、75は羽状縄文、76、77はRL縄文が施文される。78は摩滅により調整等不明である。

【石　製　品】(第32～35図)

東地区の包含層1～3層より、石鏃、石錐、尖頭器、不定形石器、石斧、石刀？、円盤状石製品、石棒、その他の石製品、礫石器などが出土している。

[石鏃](第32図1、2)1は、基部が欠損しているものである。2は、基部が凹状で抉りが比較的深いもので、基部に対して縁辺が約2倍程長いものである。

[石錐](第32図3)全体が棒状で両端に錐部がつくられているもので、石錐と思われる。

[尖頭器](第32図4)石鏃より厚くやや大型で、尖頭部をつくり出す基本的に三角形となるもので、尖頭器となると考えられる。

[不定形石器](第32図5～7)剥片等を利用し、縁辺の一部または全部に二次加工を施すものである。5は縁辺のほぼ全体に二次加工が施されており、6、7は、一部に二次加工がみられる。特に7は微細剥離が見られる。

[石斧](第32図8～12、第33図1～4)第20図8は、小形磨製石斧と思われる。破損部に穿孔の痕跡がある。第32図9～第33図3は磨製石斧であり、全てに破損が見られる。第32図12は、一部に敲打痕が見られ、刃部は丁寧に研磨される。第33図4は縁辺部に二次加工と敲打痕が見られるもので、石斧の未製品？の可能性もある。

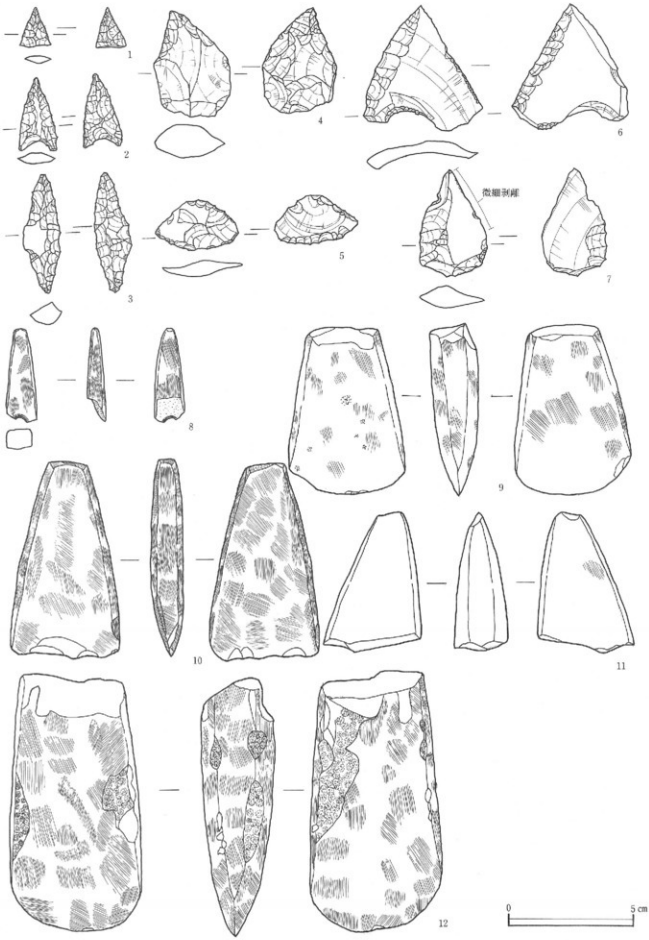
[石刀？／石剣](第33図5、第34図1)平坦な棒状を呈する磨製石器であり、第34図1は、丁寧に研磨されており、刀身のような形状を呈する。

[円盤状石製品](第34図2～4)平坦な円盤状を呈するもので、2、3はほぼ自然石を利用し、3は縁辺を二次加工することによって成形している。。

[石棒](第34図5)敲打によって整形されており、括れる部分の2カ所にそれぞれ擦痕が見られる。

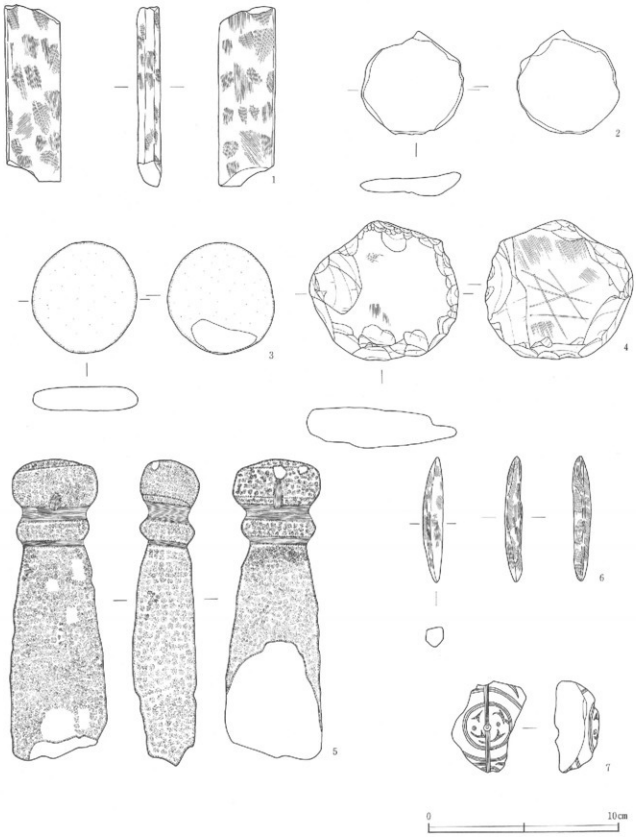
[その他の石製品](第34図6、7)6は、棒状の磨製石器で刺突具状を呈する。7は、沈線や刺突により三叉文などの文様が施されるもので、岩偶などの頭部と推測されるが、小破片のため不明である。

[礫石器](第35図)基本的に二次加工を施さないもので、使用痕がみられるものである。使用痕により、磨石(1～5)、凹石(6～8)、石皿(9～10)がある。11は、錘状の石製品で使用痕等不明であるが、石錘？となるかと思われる。

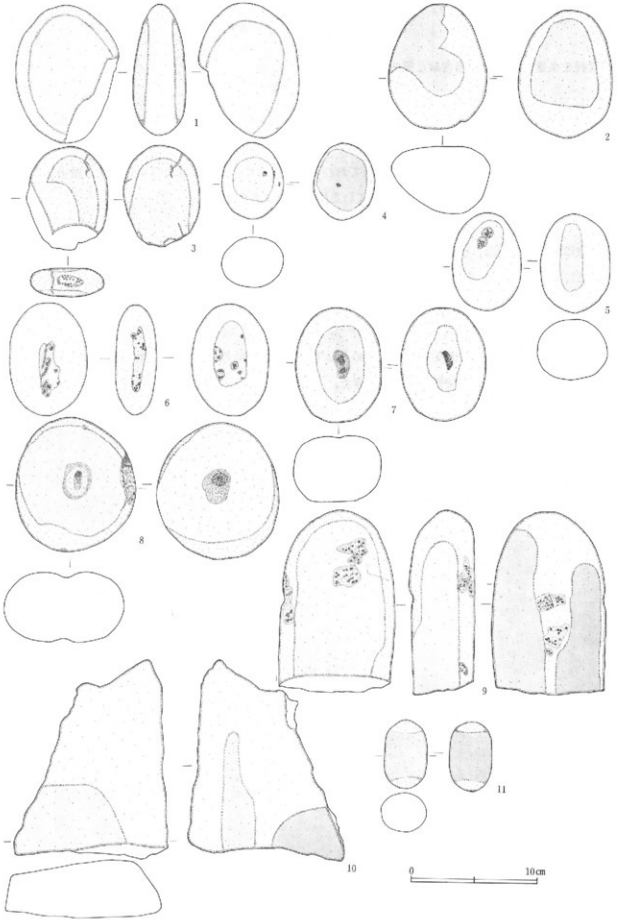


第32図　遺物包含層東地区出土石器

第33図　遺物包含層東地区出土石器



第34図　遺物包含層東地区出土石器



第35図　遺物包含東地区出土石器

第Ⅳ章　ま　と　め

・遺物を多量に含む遺物包含層と竪穴住居跡12棟を検出した。

・遺物包含層は、今回調査した区域のさらに北側や西側にものびて、広く分布すると思われる。

・竪穴住居跡は、全て遺物包含層に覆われておりこれより古く、地山面および４層上面で検出している。標高18～20mの標高に沿って分布している様子が確認された。

・遺物には、縄文土器、土製品（土偶、スタンプ状土製品、玉状土製品、小型土製品、円盤状土製品など）、石鏃、石錐、尖頭器、不定形石器、石斧、石刀？、円盤状石製品、石棒、その他石製品、礫石器などがあり、土器の特徴から縄文時代後期～晩期の資料と考えられる。

・本遺跡の付近には国史跡長根貝塚をはじめとして数多くの同時期の遺跡が散在しており、当該期における貴重な資料を豊富に得ることができた。

引用・参考文献

飯館村教育委員会	1984	「山辺沢」飯館村文化財調査報告書第5集
石巻市	1995	「石巻の歴史　第７巻」資料編１　考古編
伊東　信雄	1956	宮城県古代史「宮城県史１」
小林　達夫	1994	「縄文土器の研究」小学館
齋藤　良治	1968	陸前地方縄文文化後期後半の土器編年について 「仙台湾周辺の考古学的研究」
齋藤御恩会		「宝ヶ峯貝塚」
仙台市教育委員会	1996	「野川遺跡」仙台市文化財調査報告書第205集
東北歴史資料館	1989	「宮城県の貝塚」東北歴史資料館資料集25
東北歴史資料館	1996	「東北地方の土偶」
迫町教育委員会	1990	「倉崎貝塚・唐崎貝塚」迫町文化財調査報告書第１集
橘　要照	1968	陸前宮戸島に於ける縄文後期末遺物の研究 「仙台湾周辺の考古学的研究」
松本　秀明	1984	沖積平野の形成過程からみた過去１万年間の海岸変化「宮城の研究１」
宮城県教育委員会	1990	「摺萩遺跡」宮城県文化財調査報告書第132集
宮城県教育委員会	1980	「金剛寺貝塚」宮城県文化財調査報告書第67集
雄山閣	1996	「日本土器辞典」雄山閣
涌谷町	1971	「涌谷町史（上）」

第1表　遺物包含層（東地区）出土土器観表

図版番号	出土地区・層位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面	内面	備考	写真図版
19−1	東地区・1層	−	−	(△3.8)	隆線文、円形刺突	ミガキ？		16−1
19−2	東地区・1層	−	−	(△3.2)	磨消縄文LR、粘土粒貼付け	摩滅		16−2
19−3	東地区・1層	−	−	(△4.9)	縦位羽状縄文(LR,RL)→沈線2条	ミガキ		
19−4	東地区・1層	−	−	(△6.1)	沈線区画内磨消縄文RL	ミガキ	波状口縁	
19−5	東地区・1層	−	−	(△8.0)	RL3r→沈線で区画し上部磨消	ミガキ		
19−6	東地区・1層	−	−	(△7.7)	沈線区画内磨消縄文RL	ミガキ	波状口縁	
19−7	東地区・1層	−	−	(△6.3)	羽状縄文(LR,RL)結束→磨消	ミガキ		
19−8	東地区・1層	−	−	(△7.2)	RL→沈線で区画し口縁部磨消	ミガキ		
19−9	東地区・1層	−	−	(△7.0)	RL→口縁部磨消	ミガキ		
19−10	東地区・1層	−	−	(△6.0)	楕円状文、平行沈線、LR	ミガキ	第16図35と同一個体	
19−11	東地区・1層	−	−	(△6.4)	RL？→平行沈線	ミガキ		
19−12	東地区・1層	−	−	(△5.7)	平行沈線、三叉文、口唇部に沈線	摩滅		16−3
19−13	東地区・1層	−	−	(△3.7)	磨消縄文LR	ミガキ		
19−14	東地区・1層	−	−	(△4.3)	口縁端部：刻み目、平行沈線	ミガキ		
19−15	東地区・1層	−	−	(△4.5)	口縁端部：刻み目、平行沈線	ミガキ		
19−16	東地区・1層	−	−	(△4.3)	口縁端部：刻み目、平行沈線	ミガキ		
19−17	東地区・1層	−	−	(△4.6)	口縁端部：刻み目、平行沈線	不明		16−4
19−18	東地区・1層	−	−	(△6.0)	口縁端部：刻み目、平行沈線	ミガキ		
19−19	東地区・1層	−	−	(△5.1)	口縁端部：刻み目、平行沈線	軽いミガキ		
19−20	東地区・1層	−	−	(△4.5)	口縁端部：刻み目、平行沈線	ミガキ		
19−21	東地区・1層	−	−	(△7.0)	突起間連結右下がり横走弧線、羊歯状文、LR	ミガキ		
19−22	東地区・1層	−	−	(△7.8)	羊歯状文、平行沈線、RL	ミガキ		
19−23	東地区・1層	−	−	(△4.0)	突起間連結右下がり横走弧線、平行沈線、RL	軽いミガキ		
19−24	東地区・1層	−	−	(△5.0)	突起間連結右下がり横走弧線、羊歯状文、RL	ミガキ		
19−25	東地区・1層	−	−	(△3.6)	突起間連結右下がり横走弧線、羊歯状文、LR	ミガキ		
19−26	東地区・1層	−	−	(△6.1)	口唇部刻み目、羊歯状文、LR	ミガキ		
19−27	東地区・1層	−	−	(△5.9)	口唇部刻み目、羊歯状文、LR、羽状縄文(LR,RL)	ミガキ		
19−28	東地区・1層	−	−	(△3.6)	押し引き状刺突、平行沈線、RL	不明		
19−29	東地区・1層	−	−	(△4.4)	口縁部:平行沈線間刻目、胴部:半肉彫状磨消縄文	ミガキ		
19−30	東地区・1層	−	−	(△5.2)	口縁部:平行沈線間刻目、胴部:半肉彫状磨消縄文	ミガキ		
19−31	東地区・1層	−	−	(△3.6)	口縁部:平行沈線間刻目、胴部:半肉彫状磨消縄文	ミガキ		
19−32	東地区・1層	−	−	(△4.1)	玉抱三叉文？	ミガキ？		
19−33	東地区・1層	−	−	(△3.7)	平行沈線、粘土粒貼付け	ミガキ		
19−34	東地区・1層	−	−	(△7.4)	平行沈線間粘土粒貼付け	ミガキ		16−5
19−35	東地区・1層	−	−	(△11.7)	平行沈線間、楕円状沈文内磨消縄文LR	ミガキ	第16図10と同一個体	16−6
19−36	東地区・1層	−	−	(△6.1)	入組文	ミガキ		16−7
19−37	東地区・1層	−	−	(△4.9)	粘土粒、隆帯、円形刺突、LR	ミガキ		
19−38	東地区・1層	−	−	(△3.4)	突起間連結右下がり横走弧線、羊歯状文、RL	ミガキ		
19−39	東地区・1層	−	−	(△5.0)	羊歯状文、RL	ミガキ		
19−40	東地区・1層	−	−	(△2.4)	羊歯状文、RL	ミガキ		16−8
19−41	東地区・1層	−	−	(△7.2)	平行沈線、RL	ミガキ		
19−42	東地区・1層	−	−	(△11.3)	平行沈線、羽状縄文(LR,RL)	沈線、ミガキ		
19−43	東地区・1層	−	−	(△6.4)	平行沈線、LR	ミガキ？		
19−44	東地区・1層	−	−	(△5.7)	平行沈線間刻み目、RL	ミガキ		16−9
20−1	東地区・1層	−	−	(△5.9)	LR→入組状文	ミガキ		1610
20−2	東地区・1層	−	−	(△6.0)	撚糸文L→垂弧文	ナデ？		
20−3	東地区・1層	−	−	(△5.9)	口唇部刻み目、胴部縦位羽状縄文(LR,RL)	ミガキ		
20−4	東地区・1層	−	−	(△4.2)	口縁部：刻み目、RL（縦位）	ミガキ		
20−5	東地区・1層	−	−	(△4.0)	平行沈線間刻み目	ミガキ		
20−6	東地区・1層	−	−	(△2.3)	竹管状工具による連続刺突	ミガキ		
20−7	東地区・1層	−	−	(△5.1)	平行沈線、ナデ	ナデ		
20−8	東地区・1層	−	−	(△3.3)	平行沈線間刻み目、LR	ミガキ		
20−9	東地区・1層	−	−	(△7.0)	沈線区画内LR	軽いミガキ	突起	1611
20−10	東地区・1層	−	−	(△4.0)	沈線区画内刻み目	ナデ？		
20−11	東地区・1層	−	−	(△4.1)	口縁部:平行沈線間刻み目、胴部:半肉彫状弧文	ミガキ		1612
20−12	東地区・1層	−	−	(△3.7)	沈線文（半肉彫状）	ミガキ		
20−13	東地区・1層	(10.5)	−	(3.8)	穿孔、刺突、半円状弧線の繰り返し、RL	摩滅		1613
20−14	東地区・1層	−	−	(△3.6)	半肉彫状磨消縄文	口縁内部連続刻み目		1614
20−15	東地区・1層	18.9	10.4	4.4	口唇部沈線、大小連続刺突、胴部:半肉彫状磨消縄文	ミガキ	突起	
20−16	東地区・1層	−	−	(△5.7)	口唇部刺突、胴部:半肉彫状磨消縄文	ミガキ	突起	
20−17	東地区・1層	−	−	(△4.8)	半肉彫状磨消縄文	摩滅		
20−18	東地区・1層	−	−	(△7.5)	羽状縄文（LR、RL）	軽いミガキ		
20−19	東地区・1層	(5.9)	−	(3.7)	RL	摩滅		
20−20	東地区・1層	−	−	(△4.5)	平行沈線	ミガキ		
20−21	東地区・1層	−	−	(△3.3)	口唇部刻み目、口縁部:平行沈線、RL？	不明		
20−22	東地区・1層	−	−	(△5.3)	平行沈線、LR	ミガキ	蓋形土器？	1615
20−23	東地区・1層	−	−	(△6.8)	羽状縄文（RL、LR）	ミガキ		
20−24	東地区・1層	−	−	(△5.2)	羽状縄文（LR、RL）	ミガキ		
20−25	東地区・1層	−	−	(△10.2)	羽状縄文（LR、RL）結束	ミガキ		
20−26	東地区・1層	−	−	(△10.9)	羽状縄文（LR、RL）	ハケメ後ミガキ		
20−27	東地区・1層	−	−	(△6.4)	RL	不明		
20−28	東地区・1層	−	−	(△6.8)	RL3r？	ミガキ		
20−29	東地区・1層	−	−	(△5.0)	RL？、穿孔	ミガキ		

図版番号	出土地区・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	備考	写真図版
20−30	東地区・1層	−	−	(△10.1)	LR+L？	ミガキ		
20−31	東地区・1層	−	−	(△7.1)	LR？	ミガキ		
20−32	東地区・1層	−	−	(△8.2)	LR、穿孔	ミガキ		
20−33	東地区・1層	−	−	(△7.2)	RLR	ミガキ		
20−34	東地区・1層	−	−	(△4.5)	RL？（縦位）	ミガキ		
20−35	東地区・1層	−	−	(△2.6)	RL3r？	ミガキ		
20−36	東地区・1層	−	−	(△4.3)	穿孔	ミガキ		
20−37	東地区・1層	−	−	(△4.3)	ミガキ？	ミガキ		
21−1	東地区・2層	−	−	(△5.5)	渦巻文	ナデ→ミガキ	波状口縁	1516
21−2	東地区・2層	−	−	(△3.7)	渦巻状隆帯	ナデ？		
21−3	東地区・2層	−	−	(△4.5)	縦位隆帯、ヘラ状工具による刺突、平行沈線	ミガキ		
21−4	東地区・2層	−	−	(△3.7)	横位隆帯	ミガキ		
21−5	東地区・2層	−	−	(△5.2)	隆帯	ミガキ		1617
21−6	東地区・2層	−	−	(△12.6)	RL3r？	ミガキ	口縁部突起	1618
21−7	東地区・2層	−	−	(△7.4)	磨消縄文RL？、粘土粒貼付け、穿孔	沈線、ミガキ	口縁部大小突起	
21−8	東地区・2層	−	−	(△3.5)	LR→平行沈線	ミガキ		
21−9	東地区・2層	−	−	(△8.5)	RL→沈線区画し下部をミガキ	ミガキ		
21−10	東地区・2層	−	−	(△7.9)	RL→沈線区画し上部をミガキ	ミガキ		
21−11	東地区・2層	−	−	(△8.7)	RL、沈線	ミガキ	波状口縁	
21−12	東地区・2層	−	−	(△7.2)	磨消縄文LR	粘土粒貼付け	波状口縁頂部に突起	1619
21−13	東地区・2層	−	−	(△7.5)	山形文・平行沈線区画内を磨消縄文RL	ミガキ		
21−14	東地区・2層	−	−	(△6.1)	山形文・平行沈線区画内を磨消縄文RL	ミガキ？		
21−15	東地区・2層	−	−	(△5.3)	山形文・平行沈線区画内を磨消縄文RL	ミガキ		1620
21−16	東地区・2層	−	−	(△5.7)	平行沈線間磨消縄文LR	ミガキ		
21−17	東地区・2層	−	−	(△7.9)	沈線間磨消羽状縄文(LR、RL)	ミガキ		
21−18	東地区・2層	−	−	(△5.4)	撚糸文L、沈線文	ミガキ		1621
21−19	東地区・2層	−	−	(△7.5)	口縁部：平行沈線区画内刻み目	軽いミガキ		
21−20	東地区・2層	−	−	(△5.8)	口縁部：平行沈線区画内刻み目	不明		
21−21	東地区・2層	−	−	(△7.4)	口縁部：平行沈線区画内刻み目	ミガキ		1622
21−22	東地区・2層	−	−	(△4.9)	口縁部：平行沈線区画内刻み目	ミガキ		
21−23	東地区・2層	−	−	(△4.9)	口縁部：平行沈線区画内刻み目	ミガキ		
21−24	東地区・2層	−	−	(△4.1)	口縁部：平行沈線区画内刻み目	ミガキ		
21−25	東地区・2層	−	−	(△3.7)	口縁部：平行沈線区画内刻み目	ミガキ		
21−26	東地区・2層	−	−	(△5.4)	口縁部：平行沈線区画内刻み目	ミガキ		1623
21−27	東地区・2層	−	−	(△3.5)	口縁部：平行沈線区画内刻み目	ミガキ		
21−28	東地区・2層	−	−	(△3.2)	平行沈線間刻み目、穿孔	ミガキ	突起	
21−29	東地区・2層	−	−	(△4.1)	羽状縄文(LR,RL)→平行沈線間刻み目	不明		
21−30	東地区・2層	−	−	(△4.0)	羽状縄文(LR,RL)→平行沈線間刻み目	ミガキ		
21−31	東地区・2層	−	−	(△3.7)	平行沈線間刻み目、LR	ミガキ		
21−32	東地区・2層	−	−	(△4.5)	平行沈線間刻み目、LR	不明		1624
21−33	東地区・2層	−	−	(△3.5)	平行沈線間刻み目、LR	ミガキ		
21−34	東地区・2層	−	−	(△4.4)	弧状連結文(LR)、粘土粒貼付け	ミガキ		
21−35	東地区・2層	−	−	(△5.3)	平行沈線、粘土粒貼付け	ミガキ	口縁部突起	1625
21−36	東地区・2層	−	−	(△4.0)	平行沈線、粘土粒貼付け	ミガキ		
21−37	東地区・2層	−	−	(△5.9)	入組帯状文？、粘土粒貼付け	軽いミガキ		1626
21−38	東地区・2層	−	−	(△5.2)	平行沈線、粘土粒貼付け	ミガキ		
22−1	東地区・2層	−	−	(△4.1)	平行沈線、LR	ミガキ		
22−2	東地区・2層	−	−	(△6.1)	平行沈線、LR	ミガキ		
22−3	東地区・2層	−	−	(△7.7)	列点刺突、平行沈線、LR	軽いミガキ		
22−4	東地区・2層	−	−	(△7.6)	平行沈線、羽状縄文(LR,RL)	ミガキ		
22−5	東地区・2層	−	−	(△10.0)	平行沈線、羽状縄文(LR,RL)	摩滅		
22−6	東地区・2層	−	−	(△6.4)	羊歯状文、平行沈線、LR	摩滅		
22−7	東地区・2層	−	−	(△3.4)	羊歯状文、平行沈線、RL	ミガキ		
22−8	東地区・2層	−	−	(△4.0)	羊歯状文、平行沈線、LR	ミガキ		
22−9	東地区・2層	−	−	(△5.5)	羊歯状文、平行沈線、LR	ミガキ		
22−10	東地区・2層	−	−	(△4.9)	羊歯状文、平行沈線、RL	不明		
22−11	東地区・2層	−	−	(△5.5)	羊歯状文、平行沈線、LR	不明		
22−12	東地区・2層	−	−	(△3.9)	羊歯状文、平行沈線、LR	ミガキ		
22−13	東地区・2層	−	−	(△5.2)	羊歯状文、平行沈線、RL	ミガキ		
22−14	東地区・2層	−	−	(△6.2)	羊歯状文、平行沈線、RL	ミガキ		
22−15	東地区・2層	−	−	(△6.2)	羊歯状文、羽状縄文(LR,RL)	ミガキ		
22−16	東地区・2層	−	−	(△3.3)	羊歯状文、RL	ミガキ		
22−17	東地区・2層	−	−	(△8.2)	口唇部に刻み目、羊歯状文、羽状縄文(LR,RL)穿孔	不明		1627
22−18	東地区・2層	−	−	(△5.6)	口唇部に刻み目、羊歯状文、RL	ミガキ		
22−19	東地区・2層	−	−	(△6.1)	口縁部:平行沈線間刻み目、胴部:半肉彫状磨消縄文	ミガキ		1628
22−20	東地区・2層	−	−	(△4.3)	口縁部:平行沈線間刻み目、胴部:半肉彫状磨消縄文	ミガキ		
22−21	東地区・2層	−	−	(△6.1)	平行沈線、玉抱三叉文	ミガキ		1629
22−22	東地区・2層	−	−	(△3.8)	玉抱三叉文、粘土粒貼付け	ミガキ		
22−23	東地区・2層	−	−	(△3.3)	平行沈線	ミガキ		
22−24	東地区・2層	−	−	(△8.3)	平行沈線間LR、粘土粒貼付け	ミガキ？		1631
22−25	東地区・2層	−	−	(△7.0)	横位・弧状隆帯、刺突、穿孔	軽いミガキ		1630
22−26	東地区・2層	−	−	(△5.8)	横位・弧状隆帯、刺突、穿孔	ミガキ		
22−27	東地区・2層	−	−	(△4.5)	平行沈線上に穿孔2ケ所	ミガキ		1632
22−28	東地区・2層	−	−	(△6.1)	隆帯文、把手状粘土貼付、刺突	ミガキ		1633

図版番号	出土地区・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	備考	写真図版
22−29	東地区・2層	−	−	(△6.8)	RL(縦位)	ミガキ		
22−30	東地区・2層	(16.0)	−	(△6.7)	沈線間磨消縄文LR(浮彫状)	ミガキ		1634
22−31	東地区・2層	−	−	(△4.1)	縦位羽状縄文(LR,RL)、平行沈線間刻み目	ミガキ		
22−32	東地区・2層	−	−	(△3.9)	ミガキ、口唇部LR	ミガキ		
22−33	東地区・2層	13.3	4.9	9.7	入組状文(R)、炭化物付着	ミガキ、炭化物付着		17−1
22−34	東地区・2層	−	−	(△3.1)	口唇部刻み目、口〜胴:羊歯状文、平行沈線	ミガキ		
22−35	東地区・2層	−	−	(△6.4)	口唇部刻み目、口〜胴:羊歯状文、平行沈線	ミガキ		17−2
22−36	東地区・2層	−	−	(△5.2)	半肉彫状磨消縄文(LR)、平行沈線	ミガキ		
22−37	東地区・2層	−	−	(△8.0)	半肉彫状磨消縄文(LR)、平行沈線	ミガキ		17−3
22−38	東地区・2層	−	−	(△8.5)	半肉彫状磨消縄文(LR)、平行沈線	ミガキ		17−4
23−1	東地区・2層	−	−	(△6.2)	平行沈線、RL	縦位ミガキ		
23−2	東地区・2層	−	−	(△5.5)	平行沈線、LR	沈線、ミガキ		
23−3	東地区・2層	−	−	(△5.5)	平行沈線、LR	ナデ?		
23−4	東地区・2層	−	−	(△6.9)	平行沈線、LR	ミガキ		
23−5	東地区・2層	−	−	(△7.1)	平行沈線、LR	ナデ		
23−6	東地区・2層	−	−	(△6.9)	口唇部刻み目、口〜胴:平行沈線、RL	ミガキ		
23−7	東地区・2層	−	−	(△4.9)	口唇部刻み目、口〜胴:平行沈線、LR	ミガキ		
23−8	東地区・2層	−	−	(△6.3)	口唇部刻み目、口〜胴:平行沈線、RL	ミガキ		17−5
23−9	東地区・2層	−	−	(△3.3)	口唇部刻み目、口〜胴:平行沈線、LR、刻み目	ミガキ		
23−10	東地区・2層	−	−	(△3.6)	口唇部刻み目、口〜胴:平行沈線、刻み目	ミガキ		
23−11	東地区・2層	−	−	(△5.6)	口唇部刻み目、口〜胴:平行沈線、刻み目	ミガキ		
23−12	東地区・2層	−	−	(△4.7)	口〜胴:平行沈線、LR	摩滅		
23−13	東地区・2層	−	−	(△10.9)	口唇部刻み目、口〜胴:平行沈線、羽状縄文、刻み目	軽いミガキ		
23−14	東地区・2層	−	−	(△6.1)	口〜胴:平行沈線、RL、刻み目	ミガキ		
23−15	東地区・2層	−	−	(△5.9)	LR	ミガキ		
23−16	東地区・2層	−	−	(△6.6)	RL	ミガキ		17−6
23−17	東地区・2層	−	−	(△5.2)	RL	ミガキ		
23−18	東地区・2層	−	−	(△5.4)	沈線区画内RL	ミガキ	口縁部突起	
23−19	東地区・2層	−	−	(△7.9)	沈線区画内磨消縄文RL、粘土粒貼付	ミガキ	口縁部突起	17−7
23−20	東地区・2層	−	−	(△4.0)	平行沈線、LR	ミガキ		
23−21	東地区・2層	−	−	(△5.4)	平行沈線間刻み目、半肉彫状磨消縄文(充填縄文RL)	ミガキ		
23−22	東地区・2層	−	−	(△7.8)	平行沈線	ミガキ	口縁部突起	
23−23	東地区・2層	−	−	(△4.9)	平行沈線区画内RL	ミガキ	口縁部突起	
23−24	東地区・2層	−	−	(△4.4)	摩滅、平行沈線	摩滅	口縁部突起	
23−25	東地区・2層	−	−	(△4.3)	弧状連結文?(LR)	ミガキ	口縁部突起	
23−26	東地区・2層	−	−	(△3.7)	口縁部刻み目、口〜胴LR→平行沈線	ミガキ		
23−27	東地区・2層	−	−	(△5.0)	弧状連結文(羽状縄文LR,RL)	ミガキ		
23−28	東地区・2層	−	−	(△5.1)	平行沈線間刻み目	ミガキ	口縁部突起	
23−29	東地区・2層	−	−	(△3.5)	弧状連結文(刻み目)	ナデ?		
23−30	東地区・2層	−	−	(△6.1)	重弧状沈線文、平行沈線、把手状粘土貼付	ミガキ		17−8
23−31	東地区・2層	−	−	(△4.1)	口唇部連続する刻み目、口〜胴:半肉彫状磨消縄文	刻み目、ミガキ		
23−32	東地区・2層	−	−	(△6.5)	口唇部連続する刻み目、口〜胴:半肉彫状磨消縄文	縄文帯(LR)を残しミガ		
23−33	東地区・2層	−	−	(△3.1)	口唇部連続する刻み目、口〜胴:半肉彫状磨消縄文	平行沈線間刻み目、ミガ		
23−34	東地区・2層	−	−	(△1.8)	口唇部連続する刻み目、口〜胴:半肉彫状磨消縄文	平行沈線間刻み目、ミガ		
23−35	東地区・2層	−	−	(△6.4)	口唇部連続する刻み目、口〜胴:半肉彫状磨消縄文	ミガキ		
23−36	東地区・2層	−	−	(△7.0)	口唇部連続する刻み目、口〜胴:半肉彫状磨消縄文	ミガキ		
23−37	東地区・2層	−	−	(△4.7)	口唇部連続する刻み目、口〜胴:半肉彫状磨消縄文	ミガキ		
23−38	東地区・2層	−	−	(△7.3)	口唇部連続する刻み目、口〜胴:半肉彫状磨消縄文	ミガキ		17−9
23−39	東地区・2層	−	−	(△5.4)	口唇部連続する刻み目、口〜胴:半肉彫状磨消縄文	縄文帯(LR)を残しミガ		
23−40	東地区・2層	−	−	(△3.9)	口唇部連続する刻み目、胴部上半:半肉彫状磨消縄文	沈線、ミガキ		1710
23−41	東地区・2層	−	−	(△14.0)	口唇部連続する刻み目、口〜胴:ミガキ	ミガキ		
24−1	東地区・2層	−	−	(△5.9)	平行沈線間刻み目、羽状縄文(LR,RL)	平行沈線間刻み目、ミガ		
24−2	東地区・2層	−	−	(△3.1)	平行沈線間刻み目、LR	平行沈線間刻み目、ミガ		
24−3	東地区・2層	−	−	(△4.2)	平行沈線間刻み目、羽状縄文(LR,RL)	平行沈線間刻み目、ミガ		
24−4	東地区・2層	−	−	(△5.8)	平行沈線間刻み目、羽状縄文(LR,RL)	平行沈線間刻み目、ミガ		1711
24−5	東地区・2層	−	−	(△6.0)	平行沈線、工字状?文	摩滅		
24−6	東地区・2層	−	−	(△7.1)	羽状縄文(LR、RL)	ミガキ		
24−7	東地区・2層	−	−	(△5.5)	LR	指押圧→ミガキ		
24−8	東地区・2層	−	−	(△5.7)	LR	ミガキ		
24−9	東地区・2層	−	−	(△7.9)	平行沈線間刻み目、平行沈線	ミガキ		1712
24−10	東地区・2層	−	−	(△3.3)	平行沈線	ミガキ	内面に赤彩跡	
24−11	東地区・2層	(5.4)	−	(△1.8)	平行沈線	沈線、ミガキ		
24−12	東地区・2層	−	−	(△3.5)	平行沈線	ミガキ		
24−13	東地区・2層	−	−	(△4.5)	平行沈線	ミガキ		
24−14	東地区・2層	−	−	(△4.5)	口縁部:隆帯	沈線、ナデ?		
24−15	東地区・2層	−	−	(△4.1)	口縁部刻み目、頸〜胴部:羊歯状文、平行沈線	ミガキ		
24−16	東地区・2層	−	−	(△2.9)	口縁部刻み目、頸〜胴部:羊歯状文、平行沈線	ミガキ	ミガキにより黒色化	
24−17	東地区・2層	−	−	(△4.0)	弧状沈線文、羊歯状文	ミガキ		1713
24−18	東地区・2層	−	−	(△3.7)	口縁部刻み目、頸〜胴部:羊歯状文	ミガキ		
24−19	東地区・2層	−	−	(△2.7)	羊歯状文	ミガキ		
24−20	東地区・2層	−	−	(△3.5)	弧状・平行沈線、刻み目	摩滅		
25−1	東地区・2層	−	−	(△6.4)	羽状縄文(LR、RL)結束	ナデ?		
25−2	東地区・2層	−	−	(△6.7)	羽状縄文(LR、RL)	軽いミガキ		

図番	版図	出土地区・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	備考	写図	展図
25－3		東地区・2層	－	－	(△5.5)	羽状縄文 (LR, RL)	ナデ？			
25－4		東地区・2層	－	－	(△6.3)	羽状縄文 (LR, RL)	ミガキ			
25－5		東地区・2層	－	－	(△5.7)	羽状縄文(LR,RL)、底化物付着	ミガキ			
25－6		東地区・2層	－	－	(△6.4)	羽状縄文 (LR, RL)、穿孔	ミガキ			
25－7		東地区・2層	－	－	(△4.0)	羽状縄文 (LR, RL)、穿孔	ミガキ？			
25－8		東地区・2層	－	－	(△7.5)	羽状縄文(LR,RL)縄束、穿孔	ミガキ			
25－9		東地区・2層	－	－	(△6.4)	羽状縄文(LR→RL)、指先痕(人指指～小指？)	ミガキ			
25－10		東地区・2層	－	－	(△6.5)	RL	ミガキ			
25－11		東地区・2層	－	－	(△5.3)	RL	ミガキ？	炭化物付着		
25－12		東地区・2層	－	－	(△11.6)	RL？	ミガキ			
25－13		東地区・2層	－	－	(△6.3)	RL（結節）	ミガキ			
25－14		東地区・2層	－	－	(△6.8)	LR	ミガキ			
25－15		東地区・2層	－	－	(△6.9)	LR	ナデ？			
25－16		東地区・2層	－	－	(△5.2)	LR	ミガキ			
25－17		東地区・2層	－	－	(△11.7)	LR？	軽いミガキ			
25－18		東地区・2層	－	－	(△7.4)	RL3ｒ	ミガキ			
25－19		東地区・2層	－	－	(△7.7)	LR31？	ミガキ			
25－20		東地区・2層	－	－	(△5.8)	RLR	ミガキ			
25－21		東地区・2層	－	－	(△6.2)	LRL	不明			
25－22		東地区・2層	－	－	(△6.1)	LR＋L？	軽いミガキ			
25－23		東地区・2層	－	－	(△8.1)	縦位羽状縄文 (LR, RL？)	不明			
25－24		東地区・2層	－	－	(△3.7)	縦位羽状縄文(LR3ｒRL3ｒ)	横位ミガキ			
25－25		東地区・2層	－	－	(△4.3)	RL（縦位）	ミガキ			
25－26		東地区・2層	－	－	(△11.1)	RL（縦位）	ミガキ			
25－27		東地区・2層	－	－	(△7.3)	ミガキ	軽いミガキ			
25－28		東地区・2層	－	－	(△6.1)	ミガキ	ミガキ			
25－29		東地区・2層	－	－	(△11.2)	竹管状工具による文様	軽いナデ？			
25－30		東地区・2層	－	－	(△13.1)	櫛歯状文	ミガキ			
25－31		東地区・2層	－	－	(△5.9)	櫛歯状文	ミガキ			
25－32		東地区・2層	－	－	(△4.5)	ざつな横走条文？	ミガキ			
26－1		東地区・3層	－	－	(△5.6)	隆帯文、LR？	ナデ？			
26－2		東地区・3層	－	－	(△4.5)	隆帯文	ミガキ			
26－3		東地区・3層	－	－	(△8.5)	隆帯文、沈線、LR＋R？	ミガキ			
26－4		東地区・3層	－	－	(△5.1)	隆帯、刺突、LR	ミガキ			1714
26－5		東地区・3層	－	－	(△5.5)	刺突、ナデ？	ミガキ、ナデ			
26－6		東地区・3層	－	－	(△4.4)	粘土粒付→円形刺突、LR	ナデ			
26－7		東地区・3層	－	－	(△3.4)	隆帯、偶器状成文、LR	不明			
26－8		東地区・3層	－	－	(△5.1)	円形粘土粒付→円形刺突	ミガキ			
26－9		東地区・3層	－	－	(△3.0)	刺突、扇状縄文LR	ミガキ			
26－10		東地区・3層	－	－	(△3.6)	羽状縄文 (LR, RL)、穿孔	ミガキ			
26－11		東地区・3層	－	－	(△7.2)	RL3ｒY→重弧文？	ミガキ			1715
26－12		東地区・3層	－	－	(△9.8)	LR→沈線	ナデ？			
26－13		東地区・3層	－	－	(△8.2)	羽状縄文(LRRL)→入組文？	ミガキ			1716
26－14		東地区・3層	－	－	(△8.9)	LR→平行沈線区画→ミガキ	ミガキ			
26－15		東地区・3層	－	－	(△6.0)	LR、沈線区画、粘土粒貼付け	ミガキ			
26－16		東地区・3層	－	－	(△6.1)	RL、沈線	ミガキ			
26－17		東地区・3層	－	－	(△6.5)	羽状縄文 (LR, RL)、沈線	ミガキ			
26－18		東地区・3層	－	－	(△4.8)	LR	摩滅			
26－19		東地区・3層	－	－	(△6.3)	羽状縄文 (LR, RL)、沈線文	ミガキ			
26－20		東地区・3層	－	－	(△3.5)	燃糸文L、円文	ミガキ			
26－21		東地区・3層	－	－	(△3.8)	燃糸文？L →沈線文	ミガキ			
26－22		東地区・3層	－	－	(△5.0)	口縁部：沈線区画内刻み目	ミガキ			
26－23		東地区・3層	－	－		口縁部：沈線区画内刻み目	ミガキ			
26－24		東地区・3層	－	－	(△4.2)	口縁部：沈線区画内刻み目	ミガキ			
26－25		東地区・3層	－	－	(△6.6)	口縁部：沈線区画内刻み目	沈線、ミガキ			
26－26		東地区・3層	－	－	(△5.9)	口縁部：沈線区画内刻み目	ミガキ			
26－27		東地区・3層	－	－	(△6.1)	口縁部：沈線区画内刻み目	ミガキ			1717
26－28		東地区・3層	－	－	(△3.6)	口縁部沈線区画内刻み目、隆起線位羽状縄文(LRLRL)	ミガキ			1718
26－29		東地区・3層	－	－	(△4.3)	口縁部沈線区画内刻み目、隆起RL3ｒ？	ミガキ			
26－30		東地区・3層	－	－	(△4.3)	口縁部沈線区画内刻み目、刻原RL？	摩滅	穿孔		
26－31		東地区・3層	－	－	(△6.0)	半截竹管刻原、刻み目	ミガキ			
26－32		東地区・3層	－	－	(△4.5)	弧状連結文 (LR)、粘土粒貼付	ミガキ			1719
26－33		東地区・3層	－	－	(△4.6)	粘土粒貼付、LR、平行沈線	ミガキ			
26－34		東地区・3層	－	－		粘土粒貼付、LR、平行沈線	ミガキ			
26－35		東地区・3層	－	－	(△7.5)	粘土粒貼付、LR、平行沈線、弧文	ミガキ			
26－36		東地区・3層	－	－	(△6.1)	粘土粒貼付、平行沈線	ミガキ			1720
26－37		東地区・3層	－	－	(△4.8)	羊歯状文、平行沈線、LR	ミガキ			1721
26－38		東地区・3層	－	－	(△4.0)	羊歯状文、平行沈線	ミガキ	穿孔部分で破損		
26－39		東地区・3層	－	－	(△5.6)	羊歯状文、RL	ミガキ			1722
26－40		東地区・3層	－	－	(△5.4)	羊歯状文、羽状縄文(LRRL)結束	ミガキ			
26－41		東地区・3層	－	－	(△9.3)	羊歯状文、羽状縄文(LRRL)、平行沈線	ミガキ	内面：炭化物付着		1723
26－42		東地区・3層	－	－	(△4.9)	羊歯状文、羽状縄文(LRRL)、平行沈線	ミガキ			
26－43		東地区・3層	－	－	(△5.7)	羊歯状文、羽状縄文(LRRL)、穿孔	ミガキ	外面：炭化物付着		
26－44		東地区・3層	－	－	(△5.5)	羊歯状文、雲巻文(束縄LR)	ミガキ			

図版番号	出土地区・層位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面	内面	備考	写真図版
26－45	東地区・3層	–	–	(△3.7)	羊歯状文、半肉彫状磨消縄文(充填LR)	ミガキ		
27－1	東地区・3層	–	–	(△3.7)	渦巻状・横位隆帯、渦巻状沈文	刺突、ミガキ	波状口縁部	
27－2	東地区・3層	–	–	(△4.1)	横位隆帯→連続刺突、R？	ミガキ		
27－3	東地区・3層	–	–	(△4.4)	隆帯文、粘土貼付け	ナデ	波状口縁部	
27－4	東地区・3層	–	–	(△6.9)	弧状隆帯、LR（充填）	ミガキ		1724
27－5	東地区・3層	–	–		鋸歯状文、隆帯（横位）	ミガキ		1725
27－6	東地区・3層	–	–	(△5.6)	横位隆帯→刺突、穿孔、LR(縦位)	不明		1726
27－7	東地区・3層	–	–	(△3.2)	円形粘土貼付→刺突	ミガキ		
27－8	東地区・3層	–	–	(△5.3)	RLR？	ミガキ		
27－9	東地区・3層	–	–	(△3.8)	沈線文	ミガキ		
27－10	東地区・3層	–	–	(△4.7)	弧状連結文（LR）？	ミガキ		1727
27－11	東地区・3層	–	–	(△4.5)	平行沈線区画内羽状縄文(LR,RL)	軽いミガキ		
27－12	東地区・3層	–	–	(△5.3)	RL（結節）→頸部：ミガキ	ミガキ		
27－13	東地区・3層	–	–	(△5.9)	平行沈線区画内LR	ナデ		
27－14	東地区・3層	–	–	(△4.0)	口唇部:刻み目、口～胴部:羊歯状文、平行沈線、RL	ミガキ		
27－15	東地区・3層	–	–	(△6.0)	RL、ミガキ（一部沈線化）	沈線、ミガキ		
27－16	東地区・3層	–	–	(△4.7)	RL、ミガキ	沈線、ミガキ		
27－17	東地区・3層	–	–	(△3.7)	平行沈線	沈線、ミガキ		
27－18	東地区・3層	–	–	(△3.1)	口唇部:刻み目、胴部:平行沈線、RL	ミガキ		
27－19	東地区・3層	–	–	(△4.4)	口唇部:平行沈線、胴部:平行沈線、羽状縄文(LR,RL)	ミガキ		
27－20	東地区・3層	–	–	(△3.1)	刻み目、平行沈線、RL	ミガキ		
27－21	東地区・3層	–	–	(△6.1)	口唇部:刻み目、胴部:刻み目、平行沈線間RL	ミガキ		
27－22	東地区・3層	–	–	(△3.1)	口唇部:刻み目、胴部:刻み目、平行沈線間RL	ミガキ		
27－23	東地区・3層	15.2	5.8	10.9	口唇部:刻み目、胴:刻み目、平行沈線間羽状縄文(LR,RL)	沈線、ミガキ	内面：炭化物付着	
27－24	東地区・3層	14.5	5.4	9.8	口唇部:刻み目、胴:刻み目、平行沈線間羽状縄文(LR,RL)	縦位ミガキ		1729
27－25	東地区・3層	–	–	(△4.7)	口唇部:刻み目、平行沈線、半肉彫状磨消縄文	ミガキ		1728
27－26	東地区・3層	–	–	(△5.2)	口唇部:刻み目、平行沈線、半肉彫状磨消縄文	ミガキ		
27－27	東地区・3層	–	–	(△4.1)	口唇部:刻み目、平行沈線、半肉彫状磨消縄文	ミガキ		
27－28	東地区・3層	–	–	(△4.1)	口唇部:刻み目、頸部「S」字状沈文、胴部LR	ミガキ		
27－29	東地区・3層	–	–	(△6.0)	弧状連結文（充填LR）	ミガキ	口縁部突起	
27－30	東地区・3層	–	–	(△5.3)	弧状連結文（充填LR）	ミガキ	口縁部突起	
27－31	東地区・3層	–	–	(△3.8)	弧状連結文（充填LR）	摩滅	口縁部突起	
27－32	東地区・3層	–	–	(△5.8)	弧状連結文（充填LR）	ミガキ	口縁部突起	
27－33	東地区・3層	–	–	(△5.6)	沈線区画内充填羽状縄文LR,RL	ミガキ	波状口縁	1730
27－34	東地区・3層	–	–	(△4.7)	ミガキ	ミガキ	口縁部突起	
27－35	東地区・3層	–	–	(△4.2)	平行沈線	ミガキ	口縁部突起	
27－36	東地区・3層	–	–	(△5.0)	平行沈線間刻み目	ミガキ	口縁部突起	
27－37	東地区・3層	–	–	(△9.5)	沈線区画内LR	ミガキ		1731
27－38	東地区・3層	18.5	5.2	7.0	重斜位沈線、ミガキ	ミガキ		1732
27－39	東地区・3層	–	–	(△4.8)	弧状文？	ミガキ？	内面：炭化物付着	
27－40	東地区・3層	–	–	(△4.1)	玉抱三叉文	ミガキ		
27－41	東地区・3層	–	–	(△5.5)	LR	ミガキ		
28－1	東地区・3層	–	–	(△4.5)	平行沈線間刻み目、RL	平行沈線間刻み目、ミガキ		1733
28－2	東地区・3層	–	–	(△5.2)	平行沈線間刻み目、RL	平行沈線間刻み目、ミガキ		
28－3	東地区・3層	–	–	(△5.0)	平行沈線間刻み目、LR	平行沈線間刻み目、ミガキ		
28－4	東地区・3層	–	–	(△4.7)	平行沈線間刻み目、RL	平行沈線間刻み目、ミガキ		
28－5	東地区・3層	–	–	(△2.4)	平行沈線間刻み目、LR	刻み目、突起間弧状連結沈文		
28－6	東地区・3層	–	–	(△2.5)	平行沈線間刻み目、RL	平行沈線間刻み目、ミガキ		
28－7	東地区・3層	–	–	(△3.5)	半肉彫状磨消縄文（LR）	ミガキ		
28－8	東地区・3層	–	–	(△6.0)	半肉彫状磨消縄文（LR）	ミガキ		
28－9	東地区・3層	–	–	(△4.9)	半肉彫状磨消縄文（LR）	ミガキ、沈線		1734
28－10	東地区・3層	–	–	(△4.3)	半肉彫状磨消縄文？（LR）	刻み目、ミガキ		
28－11	東地区・3層	–	–	(△3.6)	粘土貼付け	ミガキ		
28－12	東地区・3層	–	–		平行沈線→粘土粒貼付け	ミガキ	口縁部：山形突起	1735
28－13	東地区・3層	–	–	(△6.6)	平行沈線	ミガキ		
28－14	東地区・3層	–	–	(△5.3)	平行沈線	ミガキ		
28－15	東地区・3層	–	–	(△3.6)	ミガキ	ミガキ		
28－16	東地区・3層	–	–	(△7.2)	羽状縄文（LR、RL）	ミガキ		
28－17	東地区・3層	–	–	(△4.4)	羽状縄文（LR、RL）	ミガキ		
28－18	東地区・3層	–	–	(△3.9)	羊歯状文、玉抱状三叉文	ミガキ		
28－19	東地区・3層	–	–	(△6.0)	LR	ミガキ		
28－20	東地区・3層	–	–	(△8.2)	羽状縄文（LR、RL）	ミガキ		
28－21	東地区・3層	–	–	(△6.7)	羽状縄文（LR、RL）結束	ミガキ		
28－22	東地区・3層	–	–	(△8.0)	羽状縄文（LR、RL）	ミガキ		
28－23	東地区・3層	–	–	(△4.8)	羽状縄文（LR3l？RL3r？）	ミガキ		
28－24	東地区・3層	–	–	(△5.4)	羽状縄文（LR、RL）	ミガキ		
28－25	東地区・3層	–	–	(△4.8)	羽状縄文（LR、RL）	ミガキ		
28－26	東地区・3層	–	–	(△4.3)	RL（縦位）	ミガキ		
28－27	東地区・3層	–	–	(△8.0)	RL	軽いミガキ		
28－28	東地区・3層	–	–	(△12.2)	LR	ナデ		
28－29	東地区・3層	–	–	(△5.5)	RL？	ミガキ		
28－30	東地区・3層	–	–	(△6.7)	RL	ミガキ		
28－31	東地区・3層	–	–	(△6.6)	RL	軽いミガキ		
28－32	東地区・3層	–	–	(△4.5)	RL	ミガキ		

図番	版号	出土地区・層位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面	内面	備考	写図	実版
28−33		東地区・3層	−	−	(Δ6.3)	LR	ミガキ			
28−34		東地区・3層	−	−	(Δ4.6)	LR	ミガキ			
28−35		東地区・3層	−	−	(Δ5.4)	LR	ミガキ			
29−1		東地区・3層	−	−	(Δ5.4)	LR	ミガキ？			
29−2		東地区・3層	−	−	(Δ10.0)	LR	ミガキ？			
29−3		東地区・3層	−	−	(Δ5.8)	LR	ミガキ			
29−4		東地区・3層	−	−	(Δ3.8)	RL R？（縦位）	ミガキ			
29−5		東地区・3層	−	−	(Δ5.9)	R？	ミガキ			
29−6		東地区・3層	−	−	(Δ9.0)	LR 3↓？	ミガキ			
29−7		東地区・3層	−	−	(Δ7.1)	LR 3↓？	ミガキ			
29−8		東地区・3層	−	−	(Δ6.6)	RL 3↓？	ミガキ			
29−9		東地区・3層	−	−	(Δ7.5)	半截竹管状工具による文様	ミガキ			
29−10		東地区・3層	−	−	(Δ5.8)	半截竹管状工具による文様	ミガキ			
29−11		東地区・3層	−	−	(Δ6.9)	縦重状文	ミガキ			
29−12		東地区・3層	−	−	(Δ5.3)	縦重状文	ミガキ			
29−13		東地区・3層	−	−	(Δ5.8)	縦重状文	ナデ？			
29−14		東地区・3層	−	−	(Δ7.2)	摩滅	幅いミガキ			
29−15		東地区・3層	−	−	(Δ6.6)	ミガキ	ミガキ			
29−16		東地区・3層	−	−	(Δ3.0)	ミガキ	ミガキ			
29−17		東地区・3層	−	−	(Δ5.2)	ナデ→ミガキ	ミガキ			
29−18		東地区・3層	−	−	(Δ6.1)	ミガキ	ミガキ			

第２表　遺物包含層出土土製品観察表①

図番	版号	出土地区・層位	種類・部位	特徴	写図	実版
30−1		東地区・1層	土偶・胸部（左脚）	沈線間に竹管状工具による刺突、アスファルト接合痕	18−1	
30−2		東地区・2層	土偶・胸部			
30−3		東地区・2層	土偶・部位不明	LR、粘土粒貼付け	18−2	
30−4		東地区・2層	土偶・足脚（左足）	LR	18−3	
30−5		東地区・1層	土偶・足脚（右足）	沈線区画内を凍消縄文LR、アスファルト接合痕	18−4	
30−6		東地区・1層	板状土偶・胴部	竹管状工具による刺突、渦巻き状文、胸部は粘土粒貼付け	18−5	
30−7		東地区・1層	スタンプ状土製品	上半部：LR→沈線、下半部：指圧痕	18−6	
30−8		東地区・2層	土玉状土製品	LR、二叉文、穿孔	18−7	
30−9		東地区・3層	不明	ミガキ		
30−10		東地区・2層	不明	沈線、棒状工具による刺突		
30−11		東地区・3層	小型鉢形土器	LR、（口径5.0cm、底径5.2cm、器高8.4cm）		
30−12		東地区・2層	小型手捏形土器	指ナデ、（口径4.0cm、底径3.2cm、器高2.8cm）	18−8	
30−13		東地区・3層	小型手捏形土器	ナデ？（口径4.5cm、底部3.1cm、器高2.8cm）	18−9	
30−14		東地区・3層	片口形土製	LR、沈線による区画、粘土粒貼付け、（口径11.0cm、器高3.1cm）	1810	
30−15		東地区・2層	香炉形土器	穿孔、B突起、（残存高4.2cm）	1811	

第３表　遺物包含層出土土製品観察表②

図番	版号	出土地区包含層位	長さ×幅×厚さ (mm)	重さ (g)	特徴	図番	版号	出土地区包含層位	長さ×幅×厚さ (mm)	重さ (g)	特徴
31−1		東地区1層	33×38×6	14.3	沈線間に刺み目	31−21		東地区1層	30×27×5	8.3	RL
31−2		東地区1層	35×37×6	9.8	平行沈線3条	31−22		東地区1層	33×30×7	13.6	RL
31−3		東地区1層	31×32×9	10.3	粘土帯貼付け	31−23		東地区1層	33×32×4	8.3	RL 3↓？
31−4		東地区1層	40×41×5	14.6	羽状縄文（LR,RL）	31−24		東地区1層	40×39×8	6.3	磨滅気味、？）
31−5		東地区1層	43×41×7	20.6	LR→沈線	31−25		東地区1層	38×35×4	17.5	摩滅
31−6		東地区1層	28×26×4	6.7	LR？	31−26		東地区1層	39×40×8	19.8	摩滅
31−7		東地区1層	38×39×6	19.6	羽状縄文LR,RL結束	31−27		東地区1層	20×33×10	17.2	摩滅
31−8		東地区1層	44×40×8	14.3	沈線、LR	31−28		東地区1層	29×27×8	7.4	摩滅
31−9		東地区1層	29×27×7	10.4	LR？	31−29		東地区1層	29×25×8	12.7	摩滅
31−10		東地区1層	36×32×6	12.3	LR	31−30		東地区1層	37×31×7	6.8	摩滅
31−11		東地区1層	42×38×7	17.8	LR	31−31		東地区1層	36×35×6	29.2	ミガキ
31−12		東地区1層	32×31×5	6.4	RL	31−32		東地区1層	25×24×6	17.3	ナデ？
31−13		東地区1層	42×40×8	23.2	LR	31−33		東地区1層	32×28×9	9.8	摩滅
31−14		東地区1層	36×30×6	16.9	LR？	31−34		東地区1層	40×36×5	13.2	摩滅
31−15		東地区1層	32×30×5	7.2	LR	31−35		東地区1層	20×34×5	6.7	不明
31−16		東地区1層	32×31×9	13.8	LR	31−36		東地区1層	28×24×6	6.1	木葉痕
31−17		東地区1層	30×28×3	6.4	LR	31−37		東地区1層	25×25×9	8.8	木葉痕
31−18		東地区1層	40×42×7	14.3	羽状縄文RL,LR)	31−38		東地区1層	26×28×5	14.1	摩滅
31−19		東地区1層	39×39×7	18.8	RL	31−39		東地区2層	27×25×6	11.2	沈線3条
31−20		東地区1層	37×39×3	4.6	LR	31−40		東地区2層	37×35×8	26.6	沈線1条

図版番号	出土地区包含層位	長さ×幅×厚さ(mm)	重さ(g)	特徴
31−41	東地区2層	42×46×8	19.4	沈線1条
31−42	東地区2層	26×26×8	6.7	LR沈線
31−43	東地区2層	31×24×9	9.7	渦巻文
31−44	東地区2層	33×30×9	14.3	沈線1条
31−45	東地区2層	31×33×6	10.6	沈線1条
31−46	東地区2層	45×35×8	10.4	粘土帯貼付け
31−47	東地区2層	25×33×6	13.3	LR沈線
31−48	東地区2層	25×21×5	5.3	LR→沈線2条
31−49	東地区2層	37×38×7	18.3	LR→沈線2条
31−50	東地区2層	31×35×6	9.8	羽状縄文(LR,RL)
31−51	東地区2層	23×19×5	3.9	LR
31−52	東地区2層	27×25×6	8.1	撚糸文L
31−53	東地区2層	45×43×8	23.4	LR
31−54	東地区2層	50×48×7	21.1	RL？
31−55	東地区2層	24×21×6	10.6	RL？
31−56	東地区2層	33×28×5	11.3	RL
31−57	東地区2層	24×23×6	10.9	RL
31−58	東地区2層	45×35×8	14.8	LR？
31−59	東地区2層	28×25×7	6.3	羽状縄文(LR,RL)
31−60	東地区2層	30×38×7	20.2	羽状縄文(LR,RL)
31−61	東地区2層	29×26×6	12.1	LR
31−62	東地区2層	25×24×7	14.6	LR
31−63	東地区2層	25×25×7	8.4	RL
31−64	東地区2層	41×43×8	23.5	LR
31−65	東地区2層	43×41×5	19.7	RL？
31−66	東地区2層	30×28×7	13.7	摩滅
31−67	東地区2層	43×38×6	15.3	摩滅
31−68	東地区2層	35×40×8	24.5	ナデ？
31−69	東地区2層	28×28×9	8.6	摩滅
31−70	東地区2層	43×41×5	20.8	ミガキ
31−71	東地区2層	45×47×10	33.4	摩滅
31−72	東地区2層	37×40×6	13.8	摩滅
31−73	東地区2層	45×39×12	26.9	摩滅
31−74	東地区3層	33×33×6	14.3	羽状縄文(LR,RL)
31−75	東地区3層	41×42×6	16.8	羽状縄文(LR,RL)
31−76	東地区3層	31×25×4	7.8	RL
31−77	東地区3層	48×47×5	14.1	RL
31−78	東地区3層	48×44×10	29.7	摩滅

第4表　遺物包含層出土石器観察表

図版番号	出土地区層位	分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	石材	重さ(g)	備考	写真図版
32−1	東地区2層	石鏃	1.6	1.2	0.3	珪化凝灰岩	0.4	基部欠損	19−1
32−2	東地区1層	石鏃	3.0	1.5	0.4	珪質頁岩	1.3	基部（凹状）	19−2
32−3	東地区3層	石鏃	4.8	1.3	0.9	珪質頁岩	5.15		19−3
32−4	東地区1層	尖頭器	4.3	3.0	1.3	頁岩	16.0		19−4
32−5	東地区2層	不定形石器	2.0	3.3	0.6	珪質頁岩	3.4		
32−6	東地区3層	不定形石器	5.1	4.8	0.6	珪質頁岩	13.0		
32−7	東地区1層	不定形石器	4.3	2.6	0.9	珪質頁岩	7.7	微細剥離	
32−8	東地区2層	小形磨製石斧	3.8	1.2	0.8	デイサイト質凝灰岩	4.3	穿孔痕跡	19−5
32−9	東地区3層	磨製石斧	6.6	4.8	1.9	安山岩質凝灰岩	104.0		19−6
32−10	東地区3層	磨製石斧	7.5	4.5	1.3	安山岩質凝灰岩	80.0		19−7
32−11	東地区3層	磨製石斧	5.4	3.9	2.1	頁岩	67.0		
32−12	東地区1層	磨製石斧	10.0	5.2	2.8	頁岩	264.0		19−8
33−1	東地区2層	磨製石斧	9.8	4.5	2.9	頁岩	159.0		
33−2	東地区3層	磨製石斧	11.2	2.6	2.4	頁岩	115.0		
33−3	東地区1層	磨製石斧	15.2	2.5	1.6	頁岩	74.0		
33−4	東地区1層	磨製石斧	11.0	5.3	2.5	頁岩	256.0	未製品？敲打痕跡	19−9
33−5	東地区2層	磨製石剣(石刀？)	12.9	2.4	0.9	頁岩	41.0		1910
34−1	東地区1層	磨製石剣(石刀？)	9.2	2.9	1.2	凝灰質頁岩	44.0		1911
34−2	東地区3層	円盤状石製品	5.5	5.2	1.0	頁岩	34.0		1912
34−3	東地区3層	円盤状石製品	5.9	5.5	1.3	砂岩	78.0		
34−4	東地区2層	円盤状石製品	7.3	7.8	2.1	頁岩	181.5		1913
34−5	東地区1層	石棒	15.6	5.0	3.3	安山岩？	348.5	敲打痕跡	1914
34−6	東地区1層	石製品	6.6	1.0	0.9	頁岩	7.8	刺突具？	1915
34−7	東地区1層	石製品	4.8	3.1	2.4	デイサイト質凝灰岩	21.0	岩偶頭頂部？三叉文	1916
35−1	東地区3層	磨石	10.9	7.9	4.0	安山岩	710.0		
35−2	東地区1層	磨石	10.0	7.8	5.4	石英斑岩	690.0		
35−3	東地区2層	磨石	8.3	6.4	2.3	安山岩	232.0		
35−4	東地区3層	磨石	6.1	4.9	4.0	安山岩	174.0		
35−5	東地区3層	磨石	5.5	7.7	4.8	安山岩	330.0		1917
35−6	東地区3層	凹石	9.0	6.1	3.2	安山岩	272.0		
35−7	東地区2層	凹石	6.6	6.9	5.2	安山岩	510.0		1918
35−8	東地区3層	凹石	10.7	9.5	5.6	安山岩	920.0		1919
35−9	東地区2層	石皿	14.4	9.2	5.0	安山岩	1116.0		
35−10	東地区2層	石皿	15.6	12.0	4.5	花崗閃緑岩	1260.0		1920
35−11	東地区3層	石錘？	5.6	3.4	3.1	安山岩	105.0		1921

写　真　図　版

写真1　調査区近景（南から北）

写真2　遺物包含層分布範囲状況
（東から西）

写真3　遺物包含層（南北）
セクション状況
（SPB～SPB'）

写真４　調査区西壁（南北）
セクション状況
（SPA～SPA'）

写真５　遺物包含層
遺物出土状況①
（第８図15）

写真６　遺物包含層
遺物出土状況②
（第18図１）

写真７　住居跡検出状況
（東から西）

写真８　１、２号住居跡完掘状況
（北から南）

写真９　６号住居跡完掘状況
（北から南）

写真10　6号住居跡（炉）
検出状況

写真11　6号住居跡（炉）
セクション状況

写真12　7号住居跡完掘状況
（北から南）

写真13　8号住居跡完掘状況
（北から南）

写真14　9号住居跡完掘状況
（北から南）

写真15　12号住居跡完掘状況
（北から南）

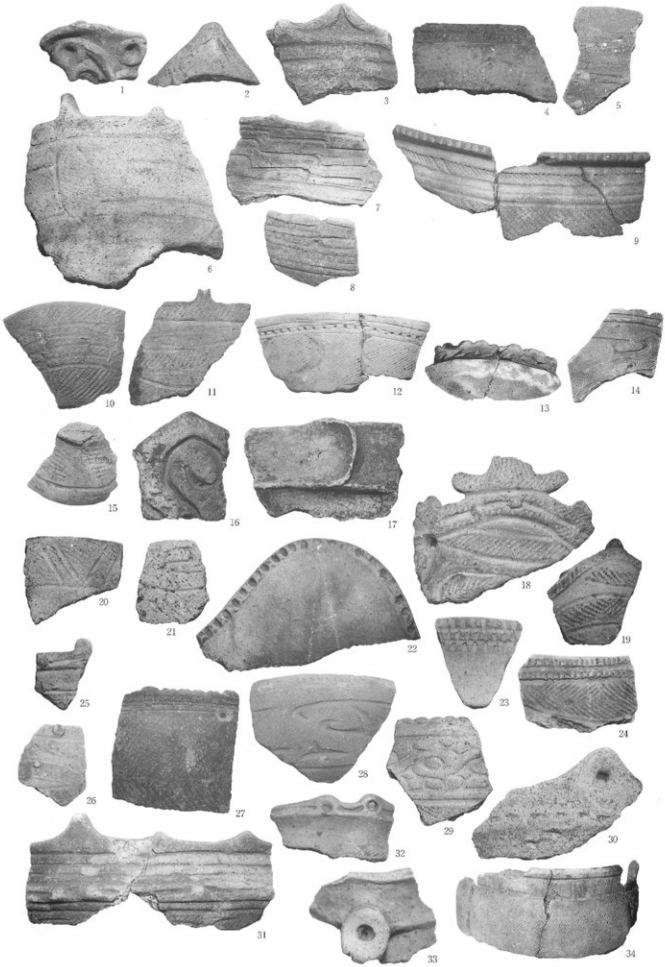


写真16　遺物包含層出土土器①

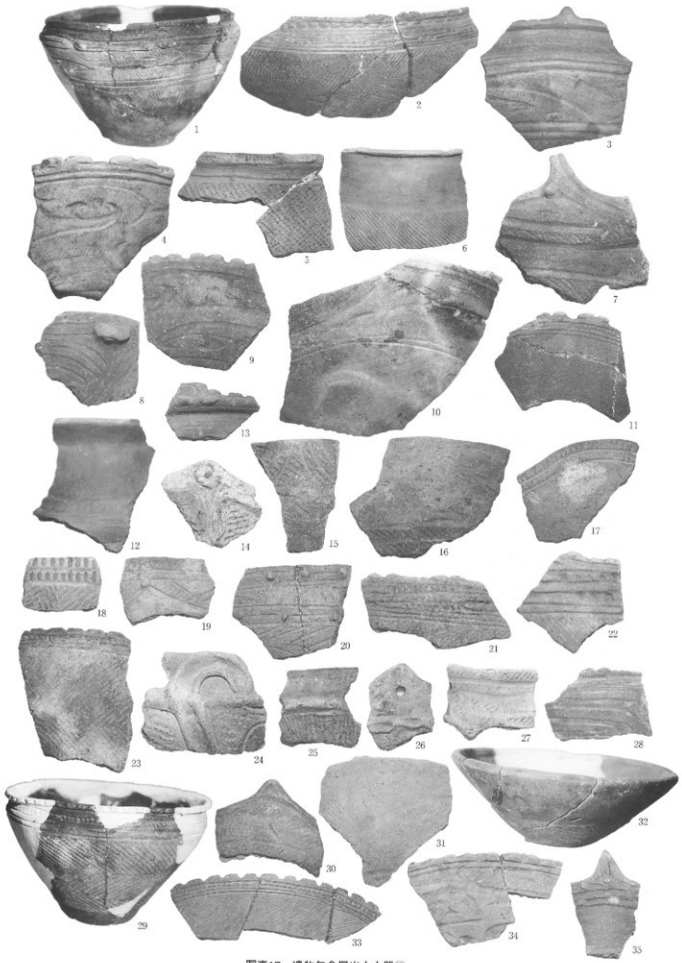


写真17　遺物包含層出土土器②

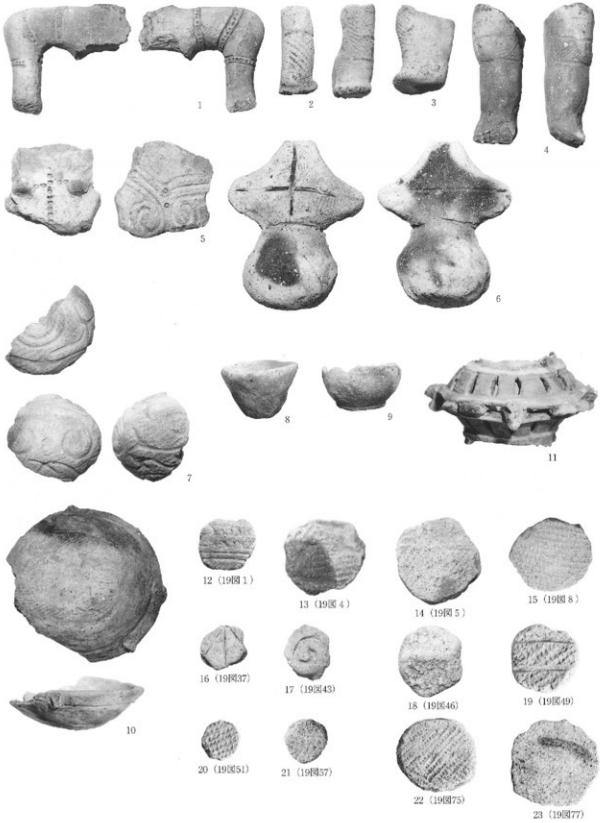


写真18　遺物包含層出土土製品

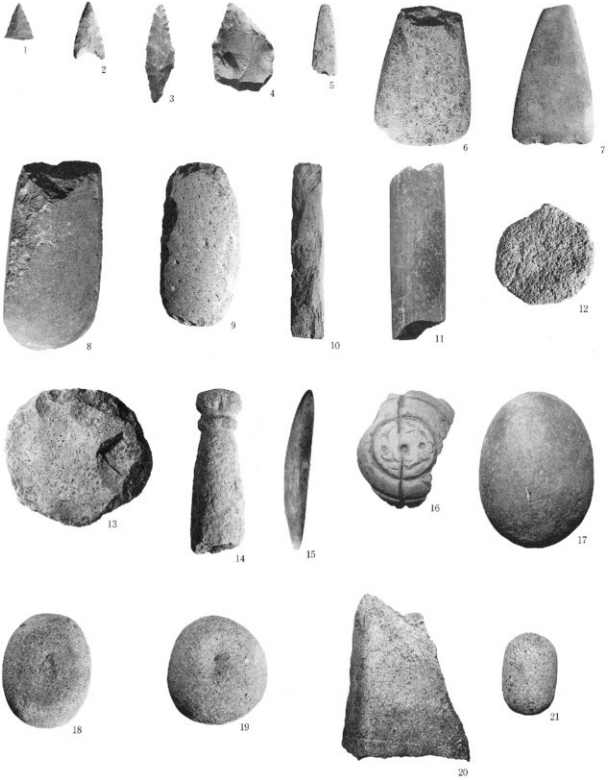


写真19　遺物包含層出土石器

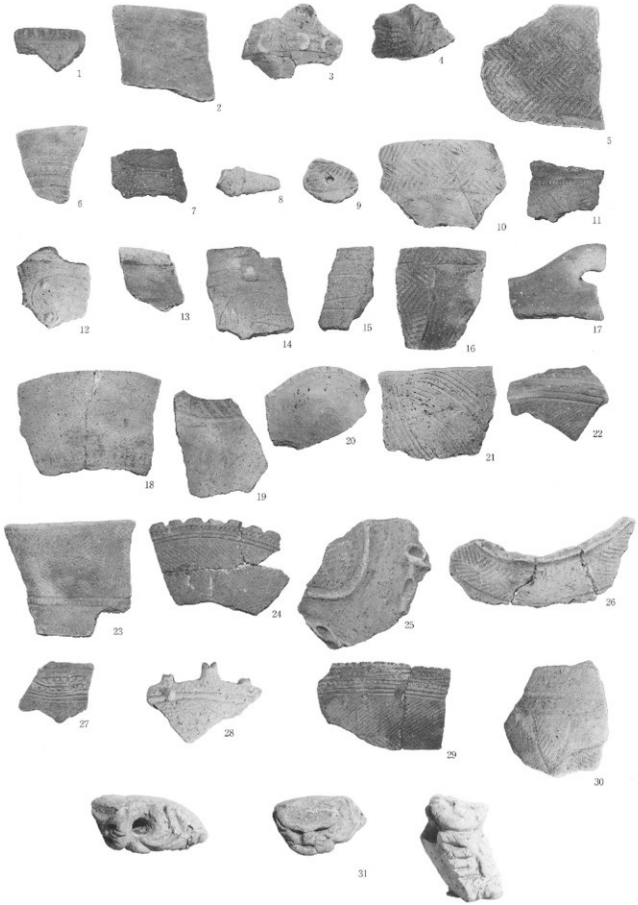


写真20　住居跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	つなぎのさわかいづか
書名	ツナギの沢貝塚
副書名	平成9年度県道河南築館線道路改良工事に伴う調査概報
巻次	
シリーズ名	涌谷町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第3集
編著者名	福山宗志
編集機関	涌谷町教育委員会
所在地	〒987－0113　宮城県遠田郡涌谷町字新町裏153－2　TEL　0229-43-3001
発行年月日	西暦　1998年3月

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ツナギの沢貝塚	宮城県遠田郡涌谷町小里字大平	0420	37003	38度35分13秒	141度08分35秒	19970811～19971030	約2,000	道路建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ツナギの沢貝塚	集落跡 遺物包含層	縄文	遺物包含層 竪穴住居跡12軒	縄文土器 石器 土製品	遺物包含層に直接覆われた集落の一端を検出した。

涌谷町埋蔵文化財調査報告書第３集

ツナギの沢貝塚

－県道河南築館線道路
改良工事に伴う調査概報－

平成10年３月31日印刷
平成10年３月31日発行

発　行　　宮城県涌谷町教育委員会
宮城県遠田郡涌谷町字新町裏153－2
印　刷　　株式会社東北プリント